HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	出稼ぎ農民研究における社会学的分析視角の展開（その2）：1890～1920年代における出稼・移民研究の諸潮流
Author(s)	浅野, 慎一
Citation	北海道大學教育學部紀要, 55, 219-256
Issue Date	1991-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29363
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_P219-256.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

出稼ぎ農民研究における社会学的分析視角の展開（その２）

――1890～1920年代における出稼・移民研究の諸潮流――

浅　野　慎　一

Peasants Working away from Home : The Development of Sociological Perspectives (Part 2)

Shinichi ASANO

目　　次

《第１部》マルクス・エンゲルスのアイルランド人出稼・移民研究

北海道大学教育学部『紀要』48号所収

《第２部》1890～1920年代における出稼・移民研究の諸潮流

序　章　本研究のねらい …… 219

第１章　カウツキー『農業問題』における農民出稼・移民論 …… 221

第２章　ウェーバー「農業労働制度」研究における農民出稼・移民論 …… 226

第３章　トーマス＆ズナニエツキ『欧米におけるポーランド農民』の考察 …… 231

第４章　パーク「移民における『人種偏見』と『マージナルマン』」の理論 …… 236

第５章　グラムシ「イタリア人移民・出稼労働者」に関する断章 …… 241

終　章　まとめにかえて …… 247

資　料　引用文献目録 …… 251

以下，次号

《第３部》レーニンにおける出稼・移民論の到達点と課題

《総　括》移民・出稼労働者研究の現代的発展のために

序章　本研究のねらい

前稿[1)]でも述べたごとく，出稼・移民労働は，世界社会の巨大な転換期につねに現れ，またその転換を推進する重要な契機でもあった。18世紀末～19世紀初頭におけるイギリス産業資本主義の確立は，アイルランド人の出稼・移民労働者のイギリスへの流入を抜きにはありえなかったし，19世紀半ばのアメリカにおける資本主義の順調な発展を支えたのも，イギリス・ドイツ・アイルランド等からの「旧移民」の流入であった。19世紀末～20世紀初頭における世界資本主義の独占段階・帝国主義への変質は，アジア・アフリカ諸国の植民地的再分割とともに後進資本主義国（日本・東欧・南欧）や植民地・半植民地的従属国からアメリカ・イギリス・ドイツ等々への「新移民」や出稼労働者の移動によって基礎づけられていた。

そして20世紀末の今日，世界社会は新たな転換期を迎えている。帝国主義批判として生まれたはずの「社会主義」諸国の激動や南北格差の激化はその一端にほかならない。西南アジアや社会

主義諸国から西欧への移民・出稼労働，中南米からアメリカへの新たな人口移動，そしてアジア諸国から日本への出稼労働者の流入は，そうした世界社会の変動の中で構造的に創出され，同時にそれを支えているといってよい[2)]。

このような世界史的な社会変動の渦中において，日本社会の構造，及び，そこでの出稼労働の内実と社会的意義も，大きな変貌期にさしかかっている。戦後日本資本主義は，欧米とは異なり，外国人労働者の新たな参入を基本的に排除し，農民出稼を初めとする国内農村人口の流動化を推し進めることによって，奇跡ともいわれる高度成長を遂げてきた[3)]。この特異性は，「日本的経営」の文化的土壌，及び，それを底辺で支えてきた日本労働者階級の主体的特質を考察する上でも，極めて重要な要素であったと思われる。ところが今日，国内農村労働力の枯渇と国際的な円高傾向の中で，アジア諸国からの外国人労働者の流入が，新たな問題として立ち現れつつある。このことは，単に低賃金労働力の確保や人種差別的な搾取といった経済的問題にとどまらず，従来の日本の経営と労働者階級が形成してきた社会・文化の構造が，根底から転換しつつあることを示唆している[4)]。

こうした諸点をふまえるならば，今日，国際的・国内的な出稼労働者が，地域と階級を越えた異文化接触の中でいかなる主体的な文化変容を遂げ，またそのことが，現代日本社会・世界社会の構造変動にとっていかなる意義を有しているのかを解明することは，焦眉の課題になっているといえよう。

本稿は，こうした基本認識に立ち，国際的な出稼研究の歴史的発展過程を総括することを目指している。したがってこの総括には，２つのねらいがある。第１は，戦後日本の出稼労働を，世界資本主義の各段階に創出されてきた国際的な出稼労働の一環として位置づけることにより，そこに刻印された資本主義的「人口法則」[5)]としての一般性，及び，戦後日本的な特殊性の双方を浮き彫りにすることである。このことは，いうまでもなく，出稼労働のあり方を基礎づけた戦後日本の資本主義・社会構造の特質を，世界資本主義・世界社会構造との関連で把握することをも含意している。そして第２のねらいは，国際的な出稼研究の蓄積の中で，出稼体験を通して培われた諸個人の主体的な変化・諸力能の発達と，彼らが形成する協働形態，すなわち社会構造の変動・変革とを連鎖させて把える社会学的な基本視角が，いかに形成・発展させられてきたのかを明らかにし，この基本視角を一層鋭利に彫琢することである。

前稿では，この総括の第１段階として，産業資本主義段階における典型的な出稼・移民労働，すなわち19世紀イギリスにおける資本主義の勃興・確立を根底から支えたアイルランド人の出稼・移民労働を素材とし，これを対象としたマルクス・エンゲルスの研究視角の展開について検討した[6)]。これをふまえ，本稿では，世界資本主義が独占資本主義・帝国主義段階に到達し，そして萌芽的には社会主義国家が成立した19世紀末から20世紀初頭における出稼・移民研究の到達点を考察したい。

19世紀末～20世紀初頭は，前述のごとく，世界資本主義体制が巨大な曲り角にさしかかった時期であった。そしてこの時期，まさに代表的な社会科学者の多くが，出稼・移民労働者問題に直面し，その把握を試みている。このことは，直接的には，この時期，現実に出稼・移民が激増し，しかもそれが国境を越えて国際的に展開しつつあったという事実に基づいている。しかし同時にそれは，当時の世界史的な社会構造変動の把握にとっても，またその中で創出されつつある新たな人間類型・パーソナリティーの理解にとっても，出稼・移民労働者が，不可欠かつ絶好の研究対象であったことをも示唆している。

そこで以下，本稿では，1890年代～1920年代の代表的な出稼・移民研究として，(1)K. カウツキーのドイツを中心とする農民出稼・移民論，(2)M. ウェーバーの東エルベ地方におけるドイツ人とポーランド人の出稼・移住に関する調査研究，(3)W. I. トーマス & F. ズナニエツキのポーランドからアメリカやドイツへの農民出稼・移住を対象としたモノグラフ研究，(4)R. E. パークの日本・中国，及びヨーロッパからアメリカへの移民を扱った諸論稿，そして(5)A. グラムシの南部イタリア人の北部やアメリカへの出稼・移住に関する所論をとりあげ，それらの諸特徴を比較考察する。

《注》

1）浅野慎一（1986）p116。

2）国際労働力移動の歴史と現状については多数の文献が発表されつつあるが，さしあたり，森　廣正（1986）・森田桐郎(1987)・駒井　洋(1989) p151・梶田孝道(1988)第４章・ゴールドソープ(1984) p25～28・角山　栄（1981）等を参照。

3）森　廣正（1986）p202・浅野慎一（1986）p113。

4）浅野慎一（1985－a）・同（1989－a）・同（1989－b）。これと対称的に，西欧における外国人労働者の文化的特質については，フェラロッティ（1972）p96～97に示唆的な記述がある。

5）大川健嗣（1979）p227。この概念に対する補注としては浅野慎一（1986）p117。

6）浅野慎一（1986）。

第１章　カウツキー『農業問題』における農民出稼・移民論

まず，1890年代の代表的なマルクス主義的研究として，K. カウツキーの『農業問題』[1]における農民出稼・移民論の論理構造を明らかにしていこう。カウツキーは，本書の中で，ドイツ各地方の農民・農業労働者の国内での出稼や移住のみならず，極めて多様な出稼・移民諸形態に言及している。例えば，夏季にはヨーロッパで，冬季には南米で耕作作業に従事するイタリアの「出稼労働隊」（Wandergängerei）や，数年間アメリカに移住し，その間に世界各地を放浪する中国の「出稼労働隊」，またヨーロッパ各地を行商で旅するドイツのいわゆる「農村旅商人」（Landgänger）[2]，そして資本主義的経営を夢見てヨーロッパからアメリカに移住する農民層等々である[3]。

カウツキーは，まず，こうした多様な諸形態での農民・農業労働者の出稼と移住を，資本主義の発展に基づいて不可避的に進む農民層の賃労働者化の一環として把握している。

すなわち第１に，出稼・移住は，資本主義的農民層分解の必然的帰結である。資本主義の発展は農民の賃労働者化を推し進め[4]，特にその中で地元に副業の機会がない場合，農民は一時的に故郷から離れ，「出稼労働」（Wanderarbeit）に出ざるをえない。その意味で出稼は，農民が「従来の現象形態を保ちながら，しかもなおプロレタリアになる」過程にほかならないのである[5]。また資本主義の発展は，農民のみならず，農業賃労働者の出稼・移住をも促進する。農業経営が資本主義化され，集約的になるほど，夏季に必要な労働力は増大し，冬季に必要な労働力は減少する。そこで，僕婢や一年中雇っておかなければならない固定的な年雇労働者は不要になり，彼らは都市に押し出されざるをえない[6]。

しかも第２に，出稼・移住は，農民層の資本主義的分解を一層促進する契機でもある。周期的・

永久的な出稼（Periodishe wie dauende Abwanderung）に出る者は，小農民の家族の中でも，ただ肉体的に強壮であるばかりでなく，精力と知識に満ちた若い家族員である。しかも農民がさしあたって行いうる副業は農業賃労働であることが多く，その仕事は自らの農繁期と重なるため，彼らは，自分の農業経営を省力化せざるをえない。こうして出稼・移住は，往々にして，その合理的経営に欠くことのできない労働力をも農業から奪い去り，農業からの離脱・農民層の没落を促進せざるをえないのである[7]。

そして第3に，農民・農業労働者に就労先を提供し，出稼・移住を促進するのは，資本主義的経営の発展にほかならない。まず都市における大工業や交通の発展は，鉄道敷設，水道開設，石坑，各種の都市土木等々の夏季間の季節労働，及び，日雇労働者，運搬人，下婢等々の年間を通した仕事を創出し，農民層のプロレタリア化の可能性を提供する[8]。また農業部門においても，資本主義化した農業経営は，多くの場合，夏場や収穫時に限ってではあるが，大量の「農業的出稼労働者」（landwirthschastliche Wanderarbeiter）を必要とする。現にドイツの多くの地方で，資本主義的農場は，地元の労働者だけでなく，他郷の労働者を「恒久的・季節的な出稼労働者」（ständige- Periodische Wanderarbeiter）として吸収することなしには，もはや存立しえないほどになっているのである[9]。

このように出稼・移民が資本主義発展に伴う農民層分解の一環であることを確認した上で，カウツキーは，当時の出稼労働・人口移動に様々な矛盾を見いだしている。

まず第1に，出稼労働者の出稼先での労働諸条件は，一般の労働者に比べても極めて劣悪である。例えば，甜菜栽培地方，特にザクセン地方に耨耕・収穫作業に出かける「ザクセン出稼労働隊」（Sachengänger）では，募集人兼現場監督者が，隠蔽せるトラック・システム等々，様々な詐欺的手段を弄して賃金の一部を横領する。またここでの労働は苛酷で，かつ労働時間は1日14時間以上と非人間的に長く，請負仕事の殺人労働が大きな役割を演じている。そしてここで就労する者の多くは妙齢の女性であり，彼女たちは性的な堕落をも余儀なくされている[10]。

第2に，したがって出稼労働者の存在は，労働者階級全体の生活の発展にとっても障害になる。出稼労働者は，経済的に遅れた貧窮な地方から出てくるため，要求水準が低く，またより「無知で隷属的」である。しかも彼らは，侵入者に対してとかく敵視しようとする，言葉の異なる他国人労働者の間で就労しなければならない。そこで彼らを労働組合に入れることは極めて困難であり，彼らの資本に対する抵抗力はますます弱くなる。そこで彼らは，最も柔順な賃金押し下げ人・ストライキ破りとなる[11]。例えば前述のザクセン労働隊においても，甜菜栽培者は，このような柔順かつ低廉な労働力を近傍で見いだすことはできないのである[12]。

第3に，出稼農民・出稼労働者の流出は，出稼供給地域の産業技術水準をも低下させる。なぜなら，農村から出て行くのは，前述のごとく，最も精力的で知能の高い若者たちであるのに対し，逆にそうした地域に移住してくるのは，経済的にも国民教育的にも，また農業技術面でも，一層遅れた地域の労働者にほかならない。したがって，他郷から来る農業労働者が，都市に引き去られた土着の労働者の完全なる補充をするということはほとんどありえず，結局，出稼・移民流出は，農業労働者の仕事能力の減退のみならず，農業の方法そのものをも退歩せしめるのである。例えば労働者の流出が著しいボェーメンでは，チェッコのタボール地方から作男を雇ってくるが，しかし彼らは極めて教育がなく，粗野で，ほとんど機械労働をなしえない。そこでボェーメンの大農場経営主は，馬鍬を倉庫にさびさせている[13]。

以上のような諸矛盾をふまえ，カウツキーは，一方で大土地所有者の側から，他方で都市労働

者階級の側から，農民層・農業労働者の出稼・離村を制限しようとする主張が生じていることを指摘している。まず大土地所有者は，自らに必要な労働力を郷土に結びつけておくために法律的強制を強める。一定の労働給付の義務に対して土地を貸与する新たな小経営が創出され，一時的に新たな封建制が成立させられるのである[14]。他方，都市労働者階級の中からは，欲求水準の低い，精神的にも低い，そして経済的に不安定なプロレタリア要素の新たな大軍が農村から繰り返し流入してきて，しかもストライキ破りをして組織労働者の努力を無駄にする限り，労働組合のアジテーションは見込みがないという主張が出てくる[15]。

しかしながら，このような出稼・移民への論難に対して，カウツキーは，むしろ出稼・移民流出が資本主義発展の中で必然的な現象であり，しかもそれが進歩的意義を有していると主張した。彼は，農業労働者にとって，移転の自由（Rechtder Freizügigkeit），特に一国からの出稼（Auswanderung），都市その他の工業区への移動を可能にする移動の自由が決定的に重要であると擁護し，官庁による出稼の制限，鉄道賃金の引き上げ，都市への入市金の引き上げ等々，労働者を土地に結びつけようとするあらゆる運動に反対したのである[16]。

カウツキーがこのように出稼・移動の自由を擁護したことの基礎には，次のような認識があった。

すなわちまず第１に，前述のごとく，農民層の出稼・移住が資本主義発展の必然的帰結である以上，それを押しとどめることは実際には不可能であり，大土地所有者による「新たな封建制」の創出も，工業の侵入によって早晩押し流されざるをえない[17]。カウツキーによれば，資本主義社会には農業の労働者欠亡につける「薬」はなく，19世紀の農業は，自力をもってこの袋小路から逃れることはできないのである[18]。

しかも第２に，農民層の出稼・移住は実際に彼らの経済的利益と合致しており，移動の自由を制限することは，彼らを一層ひどい貧窮に陥れるだけである[19]。現に，季節労働者（Saisonarbeiter）は規則的に帰郷し，賃金労働の儲けを農業経営のために供していた。また比較的長期間外に行っている人々も，大部分がその蓄えを家に送り，農業のみではなりたたない家族生活を支えていた。例えば，アイルランドにおける小経営の小作料はアメリカにおけるアイルランド人の下婢の蓄えから支払われており，多くのドイツ農民の租税も同様であった。そして大多数の出稼・移住者は，農村の貧窮にもかかわらず，結婚するために，または，父のささやかな農地を相続するために，出稼・移住先での蓄えを持って故郷に帰ってきた。この蓄えが，多くの破産に瀕した経営を再びしばしの間助け起こし，多くの矮小経営に新たなる土地の購入，牝牛の調達，崩れかかった小屋の修理を可能にした。総じて出稼・移動は，農業のために工業・都市から，その合理的構成を促進するための新たな資本をもたらしていた[20]。そこで出稼労働（Wanderarbeit）の禁止は，農民・農村労働者が故郷で得られるよりも高い賃金を求めるひとつの手段を奪うことにほかならないのである[21]。

そして第３に，―― この点がカウツキーにとって最も重要なのだが ――，出稼・移住の体験を通して，農民・農村労働者は，封建的残滓から脱却し，近代的自我・権利意識を成熟させる。もし第２で指摘した経済的理由だけならば，出稼・移住は，ある意味で，農民層分解を阻止し，農民層の保守的な小土地所有・小経営を維持する機能を果すにすぎない。しかしながらカウツキーは，このレベルを越えて，農民・農村労働者が，出稼・移住を通して，農村での自らの存在形態自体に疑問符を投げかけざるをえなくなると見ていたのである。

すなわちまず，そもそも出稼に出かける農民・農業労働者は，最も早く封建的な農村から逃れ

出す力と勇気を有し，かつ都市の文化と農村地方の野蛮との矛盾を最も早く，最も強く感じた層にほかならない。また都市と農村の賃金格差さえ，農民・農業労働者を都市に引き付ける唯一の因子ではなく，彼らは，賃金が高くても低くても出稼・出奔するのである。彼らが都市に向かう最も根本的な理由は，農村の使用者が彼らをほとんど人間とみなしていないのに対して，都会では，活気のない，隔離された，居酒屋もない単純な村よりも遥かに愉快に生活できるからである[22]。

このことは，都市と農村の間の近代的交通機関が発達し，外部の情報が農村にもたらされるほど，農民がますます容易に出稼に出るようになることにも示されている[23]。郵便は，農産物市場や播種状態の報道をもたらすと同時に，農業労働者に対して農村の奴隷制から逃れた喜びに満ちている都市の親族からの手紙を運んでくる。また新聞は，その「真面目」ぶりを示そうとすればするほど，都市労働者の歓楽生活とわがままとを罵り，かえって貧窮な農業労働者をこの都市生活に垂涎せしめる[24]。

出稼先においても，彼らは，そこでの新たな環境の影響に対して全く自己を閉ざしていることはできない。出稼先で近代的賃金プロレタリアになる以上，彼らは，封建的残滓を払拭し，労働以外では資本家と平等に相対する自由人となる。こうして出稼労働（Wanderarbeit）の体験は，従来とは全く異なる新たな欲望と思想を以て農民層を満たす。そしてかかる出稼先での体験・意識変革は，たとえ出稼農民層がその環境に対していかに旧弊であろうとも，少なくとも故郷の古い環境に対しては破壊的・革命的に作用せざるをえない。出稼先で搾取と抑圧の最も恭順な下僕であった彼らは，郷里においては不満と階級憎悪の扇動者・教唆者になる。「どこに行ってもそこで進歩を阻む」分子であった出稼労働者は，彼らが出て来た所，彼らが再び帰る所においては，「進歩の最も有力なる先駆者」になるのである[25]。

さらに，農民・農業労働者の都市への「離村」は，出稼の場合以上に，顕著な近代的自我の成熟を内包している。賃労働者は，都市において，農村とは全く異なる職業を見いだし，遥かに多くの独立家計の設定，より多くの自由と文化を見いだす。農村では，僕婢は，一生涯単に無所有者であるのみならず，結婚と家計から排除され，今なお封建的な関係の中に生活せざるをえない。彼らにとって，結婚と家庭に至る唯一の道は都市への逃亡であり，この動機は極めて強力である[26]。しかも都市において独自の世帯を形成しうるということは，国民として活動し，同じ考えを有する人を結合する可能性を，また組織と地方自治体と国家生活に参加する力によって，よりよい労働条件と生活条件を獲得せしめる可能性をも示している。このこともまた農業労働者を都市に引き寄せざるをえない理由なのである[27]。

こうした諸点をふまえ，カウツキーは，都市労働者が出稼・移住の制限を主張するのに対し，それが，個々の労働者層の狭い一時的利益の見地，組合第一主義の見地からは正しいけれども，新たなる社会秩序への発展の原動力としての全プロレタリアの立場からは正しくない，と批判した。農村住民の都市への移動は，確かにすでに組織化されている労働者にとって，全プロレタリアの中における特権的地位を獲得することを困難にするであろう。しかしながらそれは，プロレタリアの隊伍の外にいる労働人口の幾多の層を組織化し，闘争的プロレタリアに組み入れ，闘争の武器として役立たしめる可能をもたらすのである[28]。

ただしカウツキーは，あらゆる出稼労働を一概に肯定しているわけではない。彼は，出稼労働隊制度（Gang shstem），及び，児童の出稼労働については禁止することを主張している。彼によれば，募集人による人間売買を意味する出稼労働隊制は，決して出稼労働（Wanderarbeit）

の必然的な現象形態ではない。それは，公の労働媒介の発展によって排除されるべきである。また出稼労働隊においては，人間らしい住居の保障，非人間的に長い労働時間の短縮も重要である[29]。とりわけ労働隊親方（募集人）の奴隷として故郷を去り，彼の鞭の下に使役される児童達に対しては，出稼労働隊制は，道徳性のみならず，身体の健康においても危険を及ぼす[30]。そこで，14歳よりもっと上の年齢まで児童の出稼労働は禁止されるべきである[31]。総じて，カウツキーの出稼問題に関する要求を総括するならば，(A)移転の自由（Rechtder Freizugigkeit），(B)18歳までの青年の出稼労働の禁止，(C)出稼労働者の保護，21歳以前の少女の出稼労働の禁止，出稼労働隊制度の禁止，募集人の公設労働仲介による代置，となるのである[32]。

《注》

1）カウツキー（1899）。なお本書の基礎となる理論が，当時のドイツ社会民主党内のいかなる論争の中で提起されたかについては，山口和男（1974）第２章，大川健嗣（1979）p 4～5，高野政子（1972），山本左門（1981）第２章。また本書の基本的な方法については，渡辺　寛（1963）第１部，大川健嗣（1979）p 5，山之内靖（1969）p 358～359，大内　力（1972）第５章等。

2）カウツキー（1899）上巻 p 327～328。

3）カウツキー（1899）下巻 p 25～28。

4）カウツキー（1899）上巻 p 37～38・283・292。

5）カウツキー（1899）上巻 p 324～325。この点については，渡辺　寛（1963）p 4～8・11～13，大川健嗣（1979）p 2～5，大内　力（1972）第５章。

6）カウツキー（1899）上巻 p 370～371。

7）カウツキー（1899）上巻 p 290～291・302・325・374～377。

8）カウツキー（1899）上巻 p 328・下巻 p 108～109。

9）カウツキー（1899）上巻 p 305・381・325。

10）カウツキー（1899）下巻 p 231～238。

11）カウツキー（1899）上巻 p 330～331。

12）カウツキー（1899）下巻 p 231～234。

13）カウツキー（1899）上巻 p 382～385。その他，スイス人，東西プロイセン人，ポーランド人，上シュレージエン人，スエーデン人等々の出稼労働者の粗野さ，生産能力の低さについては，上巻 p 383～384を参照。

14）カウツキー（1899）上巻 p 379～380。

15）カウツキー（1899）下巻 p 189～190。

16）カウツキー（1899）下巻 p 188～189。

17）カウツキー（1899）上巻 p 379～380。

18）カウツキー（1899）上巻 p 389。なおこうした認識とかかわり，1890年代半ばの SPD 内の論争において，カウツキー（1894）p 617は，「社会民主党的農業綱領は資本主義的生産様式の下では不可能である」とし，農業綱領を拒否している。この点については，高野政子（1972）p 92～93，山本左門（1981）p 55～56。またカウツキー（1899）でも，農民の変革的要素が軽視されていることに対する批判としては，渡辺　寛（1963）p 75～83・53～72，山之内靖（1969）p 358～359・281。

19）カウツキー（1899）上巻 p 389。

20）カウツキー（1899）上巻 p 330。具体的な事例として農村行商隊がある。彼らは，クリスマス頃，

相当の持ち金を懐にして故郷に帰る。そこで彼らが出てくる地方の経済状態は相対的に良好である。彼らの収入は，家畜買い入れ，所有地の拡大，貯蓄等，経済を一層整備するために用いられる。またプファルツの貧弱な山地村落の楽人の出稼も同様である。楽人は，一般に節約して多額の金を送ってくる。そのために家族は心配なく生活し，次第にささやかな農地を買うことができる。同地方から出ている左官出稼や僕婢も，楽人ほどではないが，金銭を持ち帰る。

21) カウツキー（1899）下巻 p 239。

22) カウツキー（1899）上巻 p 386～388。

23) カウツキー（1899）上巻 p 324～325。

24) カウツキー（1899）上巻 p 371。なおミリタリズムも同様な作用を及ぼす。それは青年を農村から都市につれていき，都市的生活になじませる。青年達は，兵士になって世間を知れば，もはや農村に留まろうとは思わず，他の所に逃げていくのである。

25) カウツキー（1899）上巻 p 331～332・下巻 p 131。

26) カウツキー（1899）上巻 p 367～368・下巻 p 143。

27) カウツキー（1899）上巻 p 370。

28) カウツキー（1899）下巻 p 189～190。

29) カウツキー（1899）下巻 p 239。出稼労働隊の組織化の実態については，上巻 p 328を参照。

30) カウツキー（1899）下巻 p 206～207。

31) カウツキー（1899）下巻 p 218。

32) カウツキー（1899）下巻 p 344～345。

第2章　ウェーバー「農業労働制度」研究における農民出稼・移民論

さて次に，カウツキーと同時期のドイツにおいて，ドイツ・東エルベ地方の「農業労働者問題」（Landliche Arbeiterfrage）に関する詳細な実態調査を実施したM. ウェーバーの調査報告[1]から，彼の独自な出稼・移民問題，「農業労働者の『流動化』」（》Mobilisierung《der Landarbeiter）問題[2]へのアプローチをあとづけよう。

これらの報告の中でまずウェーバーは，東エルベ地方における伝統的な農業労働制度が，大きな変貌を遂げつつあることを指摘した[3]。すなわち従来，東エルベ地方の農業生産は，領主的大農場経営としての「ユンカー」（Junker）に，経済外的・人格的従属を伴う半隷農的労働者としての「インストロイテ」（Instleute）が労働力を提供する形で行われてきた[4]。しかし19世紀中頃以後，打穀機械の導入と甜菜栽培に代表される集約的農業の普及が，農業の季節経営化を推進して労働需要の季節的格差を拡大させ，また全農業経営に占める穀物生産の比重を低下させた。そこで，一年契約の恒常的労働力でしかも打穀分前と自己小経営を中心に生計を営むインストロイテよりも，むしろ貨幣賃金で季節的に調達される臨時・日雇労働者の方が適合的になってきた。これに伴い，従来のインストロイテは他地域に流出し，代わりに，東部とりわけポーランドから季節出稼労働者（Wanderarbeiter）が流入してきたのである[5]。「出稼運動は，農業労働者階級一般のたえず大きくなっていく部分をとらえ」，この「季節労働者という材料をいまや集約的経営がぎりぎりまで利用しつくして」いた[6]。ウェーバーは，こうした変貌を，「家父長的労働制度」から「資本家的労働制度」への変質，「純粋な資本主義的賃労働契約」の普及過程と把握している[7]。

その上でウェーバーは，このような農業労働制度の編成替えが，「ユンカー」，「インストロイテ」，

そして「ポーランド人出稼労働者」のそれぞれのいかなる主観的意識によって推し進められてきたのかを考察する。

まず第１に，ユンカーは，もっぱら「営利的観点」から，こうした労働制度の編成替えを推し進めた。彼らの農業経営にとっては，臨時労働者の方が明らかに経済的であり，しかも生活水準の高いドイツ人よりもポーランド人・スラヴ人の季節移動労働者（Wanderarbeiter）の方がより「合目的的」であった。ユンカーは，「古代の奴隷長屋の貨幣経済的な類似物」としての「出稼労働者長屋」ですませ，「労働者住宅を節約」することができた。また彼らは，「土地割り当て」もしないですんだ。もとより，一定期間に限ってみれば，臨時労働者や外国人移動労働者の賃金が必ずしも低いとは限らない。しかしながら，年間を通してみれば，移動臨時労働者の方が必要な時期だけ雇用できる上，行政法上の義務や救貧負担などを負担しなくても済み，確実に安上りであった。しかもユンカーは，外国人移動労働者の労働力をまさしく完全に搾取しつくしてしまえば，あるいは彼らが意のままにならなければ，容易に彼らを国外追放することができた。いわばユンカーは，「経済的利害だけを追求しようとして，土着労働者を殆どその土地から除去してしまい，その代わりにポーランドおよびロシアからの出稼労働者を使用」していたのである[8)]。

第２に，ポーランド人出稼労働者は，いかに劣悪とはいえ故郷ポーランドに比べれば相対的に高い賃金に引き寄せられ，「物質的満足」だけを求めて，自ら積極的にドイツに流入してきていた。その意味で彼らは，ユンカー同様，経済合理的な目的に基づき，労働制度の編成替えに積極的に参与したのである。このことの一端は，「故郷ではまだこのように高い賃金が精力的な労働へと駆り立てることのないポーランド娘」が，「外国では並外れた仕事をやりとげる」ことにも示されている[9)]。

第３に，インストロイテもまた，こうした労働制度の編成替えを積極的に推進していた[10)]。ただしその動機は，前述のユンカーやポーランド人出稼労働者のような経済合理的な目的では必ずしもない。

すなわちウェーバーによれば，故郷を捨てて工業地帯へ流出することを選ぶのは，インストロイテの中でも最も富裕な層であり，しかも多くの場合，彼らの移住前の地域の賃金水準は移住先のそれに比べて決して低くない[11)]。確かに彼らは，夏中ずっと故郷を離れて出稼（Wanderarbeit）にいき，秋には２～３カ月の「休暇」をとっても暮らしていけるだけの現金を手に入れて再び戻ってくる。その時，彼らは，故郷にいる時よりも他地域で働いている時の方が「より多く」稼げたし，また暮らしもよかったかのような幻想――全くの幻想――をもっている。しかし実は，より多く稼いだと思っている現金は，彼らが他地域で働く際に生活費を切り詰め，すなわち他の労働者たちと一緒に一軒の長屋にざこ寝をし，自分の家庭の中では決して見られないような粗食に甘んじるというような，生活費の犠牲によって節約されたものにすぎない[12)]。ウェーバーの詳細な観察によれば，インストロイテの日雇労働者化は，彼らにとって経済的には「不合理」といわざるをえないのである。

そこでウェーバーは，インストロイテの流出の原因を，むしろ彼らの次のような心理的要因に見いだした。すなわち自分の故郷において経済的には安定していても「呪わしい義務と責任」を強制される忍従の生活を嫌い，たとえ経済的には全く不安定であっても束縛されない自由な賃金労働者になることを選び取るという心情である。伝統的な農業労働制度のように，主人が家父長的に労働者の運命を左右するということに彼らはもはや耐えようとしない。この「人格的自由への無意識の衝動」「自由の魔力」ともいうべき心理的要因こそが，彼らを都市に移住させ，従来

の農業労働制度を崩壊させたのである[13]。いわばインストロイテの流出行動は，かならずしも経済的利害・「ナイフとフォークの問題」によって一義的に規定されるものではない。彼らはまず第一に，結果が幸福になれ不幸になれ，自分で自分の運命の開拓者になることを要求していたのである[14]。

そしてウェーバーは，このような農業労働制度の変化が階級闘争を顕在化させることを指摘した。農業労働者の変化は，彼らに企業家層に上昇できる展望がほとんどない以上，「階級闘争の準備段階」としての意味をもつにすぎない。ユンカーの側も，営業的企業家としての一階級に転化し，非人格的な階級支配関係を一般化させつつある[15]。そもそも農業労働者の流出そのものが「姿をかくしたストライキ」であり，これに対してユンカーによるポーランド人の導入は「めざめつつある労働者の自覚にむけられたもっとも本来的な意味での闘争手段」である。その意味で，「流出と流入」は「所有と労働とのあいだの潜在的闘いにおける闘争手段」であり，農業労働者の「流動化」は「階級闘争への動員の第一歩」にほかならないのである[16]。

しかしながら，このような階級闘争の顕在化など，ウェーバーによれば「沈みつつある小船の上での格闘」にすぎない[17]。ウェーバーは，農業労働者問題・農業労働制度の編成替えを，もっぱら「国家理念」（Staatsraison）の観点から考察した。ウェーバーによれば，それは，農業労働者の生活問題でもなければ，大土地所有者の労働力調達問題でもない。国家と国民の利害は，個々の階級の利害とは異なるのである。そしてこの問題についての国家の利害は，東部地方の社会組織の基礎がどのような状態であるか，国家が東部地方において直面する政治的使命の遂行のためにこの社会組織の基礎を究極的に頼りうるか，という問題にある[18]。

このような「国家理念」の観点から見るとき，ドイツ東部の状況は，まさに危機的であった。ドイツ人の民族性の喪失を近い将来に不可避的にもたらすような強力な作用をもつポーランド人流入，すなわち「東部地方のポーランド化」が着々と進んでいたのである[19]。現にウェーバーの調査によれば，1861年以後，東部地方におけるポーランド人の比率は徐々に増加していた。1873年以後，ロシアやガリシアに移動するドイツ人労働者の数を東部ドイツに移動するポーランド人労働者が上回り，とりわけ大土地所有が優勢な諸地域でドイツ人の減少率は著しかった。1886年にはポーランド人労働者の流入が禁止され，国内にいたポーランド人労働者は国外追放されたが，この流入禁止措置はその後緩和され，1890年にほぼ廃止され，許可制で外国人労働者の使用が公式に認められた。そこで1891年には，国境に接する4州だけで少なくとも農村日雇労働者総数の24分の1にあたる33000人のスラヴ系の流民群（Nomadenschwärme）が流入した[20]。「周旋人がロシアで駆り集めたポーランド人の出稼労働者たち」が，「遊牧民のように隊を組んで，春になると幾万人となく国境を越えて入ってきて，秋になるとまたひきあげて」いた[21]。しかもひとりのポーランド人労働者は，ドイツ人労働者ひとりを駆逐するのではなく，ドイツ人労働者の家族全部を駆逐する。したがってポーランド人流入によって駆逐されたドイツ人労働者の実数は，統計上の何倍にもなるのである[22]。

しかもこのような「東部地方のポーランド化」は，単なる民族問題にとどまらない。それは何よりも，ドイツ人の文化水準・農村住民の栄養状態と欲求が，スラヴなみの「奴隷のような文化水準」まで押し下げられることを意味していた[23]。こうした観点からウェーバーは，東エルベに出稼にやって来るポーランド人・スラヴ人季節移動労働者（Wanderarbeiter）の状態が極めて悲惨であることを詳細に指摘している。彼らは，「元気づけ」と称して火酒を与えられ，泥酔させられることにより，金を与えるよりも容易に過重労働を押しつけられていた[24]。また彼らに

与えられる住居は，バラックや廐，空穀倉であり，そこに彼らは10人以上で一緒に生活していた[25]。総じて彼らは，国外追放を恐れ，土着のドイツ人労働者ならば決して応じないような不当な要求でさえ応じなければならなかった[26]。そしてこうした外国人出稼労働者の劣悪な労働条件こそが，土着のドイツ人農業労働者を駆逐し，かつ，彼らの大土地所有に対する賃金闘争を麻痺させてしまう原因である[27]。ポーランド人がドイツ人を駆逐するのは，「経済的な知性とか資本力とかの点で優れている」からではなく，優れていないことこそが「彼らの勝利の原因」であった[28]。ウェーバーは，ポーランド人の輸入を，中国人苦力（Kulis）の輸入よりもはるかに危険なものと見なした。なぜなら，ドイツ人労働者は苦力とは決して「同化」しないが，ポーランドとの関係ではこの半ばゲルマン化されたスラヴ人に「同化」することがありうるからである[29]。

以上のような考察をふまえ，ウェーバーは，眼前の経済的利益のために国家的・文化的危機を醸成させている大土地所有者には，もはや国家的利益を代表する資格も能力もなくなったと批判する。いまや東部の大農業経営は，ドイツをポーランド化させる最大の推進者であり，ドイツ民族の危険きわまりない敵になっている。大土地所有の使用する労働者がポーランド人である以上，大土地所有には，民族問題を擁護し，農業労働者との国民的利益を擁護することは究極的に不可能になっているのである[30]。

そしてウェーバーが「国家的観点」から構想する方策は，スラヴ人労働者の流入遮断とドイツ人農業労働者の確保である。彼は，ドイツ東部地方からロシア系ポーランド人労働者を無条件に閉め出すことを主張し，とりあえず直ちに着手すべき過渡的段階として，穀物の収穫期以前にドイツに入ってくるすべての外国人労働者を閉め出すことを提起する。ウェーバーによれば，異なった体質の二つの民族が同じ一つの地域で労働者として自由に競争することは不可能であり，ドイツ人労働者はポーランド人労働者と競争することはできない。ドイツ人労働者がポーランド人労働者と競争するためには，彼らの欲求を低い文化水準にまで押し下げなければならないが，「文化水準の低いポーランド国民の仲間入り」を，ウェーバーは「きっぱりとお断り」するのである[31]。

とはいえウェーバーは，ドイツ人の国内での自由移住権（Freizügigkeit）に対しては，これを擁護する。確かに彼は，特に若い労働力が農村から都市へと移転していく場合，まさに信じられないほど無計画で，無目的で，後の結果を予想していないことが多く，しかもその連中が都市へ出て得られると思っているよりよい境遇などというものは，現実とは無縁な夢にすぎないと指摘している。しかしながら，それにもかかわらずウェーバーは，自分自身を自由に思い通りにするといういわゆる一般的人権を侵害することには同意しない。また国内移動の制限が，現実には実行不可能であることもあわせて指摘している[32]。

それではどのようにして東部地方の農業労働力を確保するのかという問題が残るが，ウェーバーはこの点に関して二つの提言を行っている。第１は，土地持ち労働者層の創出である。これについてウェーバーは，インストロイテの移動の心理的動機の考察をふまえ，労働者にいくら土地を与えても，労働者が独立農民へ社会的・身分的に上昇しうるチャンスが与えられなければ，労働者は永続的にその土地にとどまろうとはしないことを指摘している。労働者にとって決定的に重要な問題は，「上を仰いで，上がひらかれているかどうか，独立した生活を営むべき上昇の可能性があるかどうか」という問題であり，その可能性がなければ，土地は労働者を束縛する「呪いの的」になってしまうのである[33]。第２は，自家消費を目的とした小土地所有の内国植民（innere Kolonisation）である。これは重要な施策ではあるが，ここでも文化的危機が問題になる。馬齢

薯栽培で満足するポーランド人は，農民になっても穀物を食べたがるドイツ人よりも，遥かに零細な面積で生活できる。だから内国植民は，ポーランド人の零細経営を結果的に作り出し，農村住民の文化的要求を低下させながら，東部地方の民族性喪失を結果する危険を生みだす。そこでウェーバーは，内国植民の規模が，ドイツ人の農民家族を十分養うに足るだけの大きさ以下の農地を作ることを警戒しなければならないと述べるのである[34)]。

《注》

1）ウェーバー（1892－a），同（1892－b），同（1893－a），同（1893－b），同（1894），同（1895）。農業労働制度に関する調査は，1890～92年に社会政策学会が実施したものと，1893～94年に福音社会派会議が実施したものがある。この問題に関するウェーバーの方法論の解説には，山口和男（1974）第6章，村上丈司（1981－a），同（1981－b），鈴木正仁（1988），ベンディクス（1962），住谷一彦（1970），ケスラー（1979），鼓　肇雄（1971）等がある。

2）ウェーバー（1894－2）p103。

3）ウェーバー（1892－a）p 4。

4）ウェーバー（1894－1）p93～98・107。いくつかの州法では，インストロイテにたいして僕婢条例が適用され，自由移住権を制限して契約がすむまえに流出した場合には強制送還さえ行われた。団結権もなかった。

5）ウェーバー（1893－a）p21～22・25，同（1894－2）p101，同（1985）p11～12。この点に関する実証研究としては，加藤房雄（1976－a），同（1976－b）。なおウェーバー（1893－a）p15・19では，工業発展が農村労働制度に破壊的な影響を及ぼすこと，及び，北西部でも国外や工業に人口移動がみられることにも言及している。

6）ウェーバー（1894－2）p102。

7）ウェーバー（1894－1）p99・107。

8）ウェーバー（1893－a）p27，同（1894－2）p102・112，同（1895）p12。

9）ウェーバー（1894－2）p102。

10）ウェーバー（1893－a）p24～25。

11）ウェーバー（1893－a）p24～26，同（1894－2）p102～103，同（1895）p11。同（1893－a）p17～18によれば，北西部でも移住するのは，農業労働者のうち，最も生活水準が高く，社会的にも最高位にいる階層である。同（1894－2）では「経済的要因と心理的要因の結合したもの」と述べられている。

12）ウェーバー（1893－a）p26，同（1894－2）p103。

13）ウェーバー（1893－a）p24～26。北西部の農業労働者も，ひとたび決心がつけば，大海を越え，古い因縁が完全に切れたところへ移住し，そこに土地を買って定住し，最もたやすく愛郷心から離れてしまう。p18～19。同（1894－1）p108，同（1894－2）p103，同（1985）p11。

14）ウェーバー（1892－a）p797～798，山口和男（1959）p128～129。

15）ウェーバー（1894－1）p108。

16）ウェーバー（1894－2）p103・113。

17）ウェーバー（1894－2）p114。

18）ウェーバー（1893－a）p33～34。

19）ウェーバー（1893－a）p27～28・31～32。

20）ウェーバー（1893－ａ）ｐ28～31。
21）ウェーバー（1895）ｐ12。
22）ウェーバー（1893－ａ）ｐ31～32。
23）ウェーバー（1893－ａ）ｐ27～28，同（1894－１）ｐ101。
24）ウェーバー（1892－ａ）ｐ126・286。カウツキー（1899）下巻ｐ235。
25）ウェーバー（1892－ａ）ｐ240。カウツキー（1899）下巻ｐ236。
26）ウェーバー（1893－ａ）ｐ26～27。
27）ウェーバー（1893－ａ）ｐ28・31～32。
28）ウェーバー（1895）ｐ12。同ｐ10は，スラヴ人種の「暮らしに対する要求水準が，物質面でも精神面でもドイツ人よりも低く，そのために彼らは勝つことになった」と述べている。
29）ウェーバー（1893－ａ）ｐ37～38。ウェーバーは，ザクセン流浪とよばれる労働者移動も，従来の農村の労働制度に破壊的な影響をもたらすものではあるが，その破壊はそれほど危険ではないと述べている。なぜなら，第１にザクセンでは集約的な農業生産が行われ，今なお耕作が増加している。第２に強力な土着の農民層があり，東部のような労働力の空白状態がみられない。そして最も重要なこととして第３に，ザクセンでは，土着の農業労働者が，東部からやってきたロシア人やポーランド人の労働者の影響をうけないように注意して身を守っており，むしろこの渡り者の低い生活水準を軽蔑の念をもって見下し，決して「同化」してしまわない。ｐ19～20。
30）ウェーバー（1893－ａ）ｐ29・31～32，同（1894－２）ｐ113～114，同（1895）ｐ14。
31）ウェーバー（1893－ａ）ｐ36～37，同（1895）ｐ14。なお鼓　肇雄（1971）ｐ28～29は，ウェーバーが必ずしも民族排外主義者ではなかったと指摘している。。
32）ウェーバー（1893－ａ）ｐ39～40。北西部においても，都会へ出ていくのは，ウェーバーによれば大都市の娯楽や放縦さのみに憧れている，若くて不品行な連中である。ただし彼は，外国へ移住する労働者が，老練で労働意欲もさかんな家族であることも認めている。ｐ15～19。
33）山口和男（1959）ｐ114。
34）ウェーバー（1893－ａ）ｐ49～50，同（1894－２）ｐ116～117，同（1895）ｐ15。

第３章　トーマス＆ズナニエツキ『欧米におけるポーランド農民』の考察

では，出稼・移民の供給地であったドイツ農村やポーランドから，世界最大の出稼・移民の吸収地であったアメリカ合衆国に目を転じよう。「人種の坩堝」とよばれたシカゴにおいて1920年代のシカゴ学派をリードしたのは，２つの移民研究――W. I. トーマス＆F. ズナニエツキのポーランド農民研究，及び，R. E. パークのアジア系移民研究――であった。

まず，トーマスとズナニエツキの『欧米におけるポーランド農民』[1)]について検討する。

本書の研究方針は，ポーランド人「出稼」（seasonal immigration）・「移民」（immigration）を対象として，ある文化的集団に属する人々が別の文化的集団へ移動する時の「態度」と「価値」の変化を，個人と集団の組織化と解体という観点から見ることにあった[2)]。

トーマスとズナニエツキは，まず，ポーランド農民の出稼・移民の動機を，「経済的上昇欲求」と「新しい経験を求める欲求」に見いだした。彼らによれば，ポーランドにおける農民の生活条件は，50年前に比べて格段に改善されてきており，また少し努力すれば一層改善できるにもかかわらず，農民たちは，生活条件の僅かな悪化を理由に，簡単にアメリカに「移住」（emigration）

する。これは，農民の間に「経済的上昇欲求」が生じ，従来の生活水準に対する潜在的不満が表面化したことを意味している[3]。また，ドイツに「出稼」（seasonwork）に行くポーランド農民は，故郷で季節労働をする場合には，仕事をさしあたりの「必要悪」とみなし，日雇の仕事を求めるにもかかわらず，出稼先のドイツでは，高収入を求めて出来高・請負の賃労働で懸命に働こうとする。このことも，客観的な労働条件や環境の違いだけでは説明できず，むしろ，彼らの「経済的上昇欲求」，新たな環境の中にいるという気分の問題が重要な要素となっている[4]。こうしてアメリカへの「移民」（emigration）とドイツへの「出稼移民」（seasonal-emigration）の「少なくとも50％を占める理由」が，共同体の閉鎖性が破られ，多様な可能性が出てきたことによって生み出されてきた，「新しい経験を求める欲求」によって説明されるのである[5]。

同時にトーマスとズナニエツキは，ドイツへの出稼などを通して外部世界と接触した結果，ポーランド農民に「個人主義的傾向・態度」が培われてくることに注目した。外部世界で遭遇した新しい価値，例えば，飲酒，珍しい食物，新形態の性的魅力，虚栄，そして個人主義的な経済組織の類型等々に呼応して，「個人主義的態度」が形成されるのである[6]。こうした態度変容の一端を，トーマスとズナニエツキは，あるポーランド農民の３人兄弟を事例に示している。ジャン家のミカルは，全く農民的で都市に全く関心がない。彼の夢は，軍隊から故郷に戻って父の農場を継ぐことである。彼はイエに強い愛情を感じ，連帯感をもっている。彼には個人的な自己主張はほとんどみられない。ウィクトーは，ずっと農場経営者でいるつもりではあるが，しかし，個人的自己主張が強く，これが父親との反目の一原因となっている。また必要最低限以上に一般教育を受けたり，より上流の社会の形式やマナーを身につけたりすることを望んでいる。ところがアメリカに行ったマックスになると，彼がアメリカで経歴を歩み始めた時点においてさえ農民的要素をあまりもっていなかったが，アメリカで７年間すごした後にはその要素はほとんど皆無になっている。彼は，その経歴の中で，農業，財産，共同体的利害関心，イエ的連帯等々，農民としての理想を一つ一つ投げ捨て，父親の上昇志向を継承しつつも，それを典型的な中産階級の経歴という全く新しい方向で発展させているのである[7]。

そしてトーマスとズナニエツキは，このような出稼・移民に伴う新たな態度の出現が，従来の第１次集団（家族と共同体）を解体の危機にさらすことを指摘した。すなわち，個々の成員の行動に対する集団の社会的規制力が減少し，「社会解体」が進むのである[8]。従来のポーランド農民の経済生活においては，極めて社会的・質的な価値をもつ家族的な経済組織体系が重要な役割を果たしていた。ところが，「経済的上昇欲求」を通して構成される「個人主義的」体系は価値の量化を伴い，従来の価値と矛盾せざるをえない[9]。また従来のポーランド農民社会では，諸個人は，家族や村人に対して「応答を求める欲求」や「認知を求める欲求」をもつことによって第１次集団に組み込まれ，第１次集団を主体的に維持してきた。しかし，「応答や認知を求める欲求」よりも「個人主義的態度」の方が重要になってくると，集団の規制はその効力を失わざるをえない[10]。このような「社会解体」は，アメリカにおけるポーランド人移民社会に最も典型的に見られる。ポーランド農民の男女の応答は，従来，集団利害の共通面にパーソナリティーを完全に従属させることによって確保されてきた。そこで個人的利害が発達するとこの調和は崩壊する。アメリカ「移民」（immigrants）の中では特にこうした不調和が目立ち，家族生活が完全かつ急激に解体する例が数多く見られるのである[11]。

そしてトーマスとズナニエツキは，以上みてきたような出稼・移民に伴う諸変化の中に進歩的意義を見いだしている。まず彼らは，こうした「社会解体」過程の中からこそ，「合理的協同」

という基盤の上に新たな社会集団が再組織化されてくると指摘した[12]。また特にトーマスは，移動性と抽象的思考の発達との間に密接な関係を見いだし，人口の移動性を，それ自体，知的発達にとって重要な要素として位置づけた。彼によれば，農民が普段もっている知識は，彼の職業の性質からして，具体的・個性的なものである。農民は，自分が手塩にかけた土地や家畜のそれぞれを個別的性格的に知っている。このような農民の実際的な知識は，ほとんど科学的な一般化という抽象的形式をとらない。農民は，他のことを知らないし，また知る必要もないので，ただ具体的用語においてのみ物事を考える。これに対して，例えばユダヤ人の知的性格と抽象的合理的な考え方は，何よりも彼らが都市の住人であったことと関係している。「さまよえるユダヤ人」は，彼らが目にした様々な事実を叙述する間に分析と分類を行い，抽象的な概念を習得してきたのである[13]。

とはいえ，こうした出稼・移民の進歩的意義は，つねに順調に発現するとは限らない。むしろ，「人種の坩堝」としてのシカゴでは，それとは逆の現象――ポーランド人移民の道徳的退廃――が頻発していた。トーマスとズナニエツキは，この現象を次のように説明する。古い社会体系が急激に没落して新しい社会体系がそれにスムーズにとって代われない場合，人々は新しい「価値」に対するスキームをもつことができず，「自分自身の根本的な利害を，効果的・連続的に実現していくために自分の全生活を組織していく能力が減退し」，いわゆる「個人解体」状態に陥る[14]。そしてアメリカにおけるポーランド移民は，こうした「個人解体」状況を顕著に示す実例である。

すなわちまずポーランド農民は，一種独特の伝統と習慣を背負ってアメリカにやってくる。そのためポーランド農民にとっては，アメリカの状況は，もともとアメリカに住んでいた人々とは非常に違った形で定義される[15]。例えば，ポーランド農村では伝統的な社会組織が確固として固定され，個人の生活組織は完璧に既存の社会秩序に統合されていた。そこで第１次集団の枠内で育ったポーランド農民は，身の回りの習慣や環境に極めて依存的なパーソナリティーを発達させている。そのため彼らは，アメリカで，より緩やかな社会秩序に直面した場合，そこにふさわしい「抽象的な個人主義的道徳，宗教的神秘主義，法・経済体系といった諸要素からなる新しい生活組織」を発達させる準備ができていない。彼らがこの新たな環境のもとで生活を再組織化していくためには，「彼が故国で別れを告げてきたような強力で凝集性の強い第１次集団」が必要になる。しかし，現実のポーランド系アメリカ社会における社会集団の集団規制力は，第１次集団のそれより遥かに弱い。そこで道徳的頽廃が生じ，「個人解体」が進行する。ポーランド農民がアメリカで示す堕落・頽廃は，こうした認知枠から説明されるのである[16]。

トーマスとズナニエツキは，ポーランド移民の「個人解体」を，経済的依存，夫婦関係の崩壊，殺人等々の現象に見い出し，さらにその基盤に，気質的態度の噴出があると述べている。従来の古い規則が崩壊し，さりとて指針になりうる新しい合理的価値が組み立てられないとき，状況定義の手段としては気質的態度に頼るしかないからである。ところがそれでは諸個人は新しい生活組織を形成できず，結果的にこれまでの性格を解体する羽目に陥る。しかもこの頽廃過程は移民二世で更に大きくなる。なぜなら，「両親は自分たちが社会的原則と情緒の方面で受けたもの以下しか与えることができず，またアメリカの都市で成長した子供たちはもっと自由で，両親に対する尊敬の念が薄くなっている」からである。子供たちの解体は，男子は放浪や詐欺行為，女子は性的頽廃に現れている。ただ子供たちの場合，社会的制裁となる規則が崩壊するというより，むしろ初めからそれなしで生きているわけだから，解体というより「道徳の欠如」状態に陥って

いるのである[17]。

以上のような移民の「個人解体」の構造について，トーマスとズナニエツキは，ひとりのポーランド系アメリカ「移民」（immigrant）――ウラデック――の自伝を素材として，さらに具体的に考察した。

ウラデックは，農民出身であり，農民とよく接触しているが，もはや農村には住んでいない。彼は，不熟練労働者と中流の下の階級との中間に位置している[18]。しかしウラデックにおいて最も重要な態度は，農民に典型的な態度としての「社会的本能」である。彼は，全面的に社会に依存しており，彼の自発的性向そのものが「応答を求める欲求」と「認知を求める欲求」に基づき，他者の基準に頼りがちである。彼にとって状況の意味を決定する要素は，他者の現実的ないし想像上の態度である。例えば，彼はドイツやロシアで愛国者として振る舞ったことがあるが，それはあくまでそうすることが同郷者の認知を得ると思われたからである。多くの場合，経済的関心が最初に「社会的本能」から脱却するが，ウラデックのそれは，依然として「社会的本能」に従属している。彼の物質的富を求める欲求は，それに付随する社会的認知に基づく限りで起きているのである。こうした意味でウラデックは，典型的な第１次集団の一員である[19]。

そこで，第１次集団による態度の組織化は，ウラデックの完全な個人解体を防ぐのに役立っている。彼の家族は衰退しつつある第１次集団であるが，その影響力のために彼は真の「放浪者」（vogabond）や犯罪者になりきれないでいる。真の放浪者の特徴は，規則的な生活がないことを全く気にとめないことである。しかしウラデックは，放浪している間も絶えずそれを気にしている。彼は，「新しい経験をする喜び」それ自体のために放浪するのではなく，何かよりよいことが起きるかも知れないという期待から放浪し，それだけに何もおこらないとひどくがっかりして，放浪の不安も加わって落ち着こうという欲求を日ごとに強める。彼は，かつて経験した組織化された生活の考え方や習慣を完全に忘れてはいないので，現在の自分を惨めだと思っている[20]。一方，ウラデックがくぐり抜けてきた環境は，いずれも個人的理念を開発・発達させるほどものではない。しかも彼がついたパン業界の仕事は，独立性が強く，規則性に欠け，定まった標準がない。このことが彼の無頓着さを培い，個人解体の要因になっている[21]。

こうして結局，ウラデックのパーソナリティーは，彼の人生全体を通して，「ボヘミアニズム」と「フィリスティニズム」，また「新たな経験を求める欲求」と「安全を求める欲求」との間を，揺れ動いてきた。彼は，ある時には，既存の社会秩序を脱して様々な新たな影響を受容することを望み，またある時には，反省的態度を著しく固定化させて既存の社会秩序への同調を求める。彼は，結局，環境や自分自身の制御をより広げるために一貫した生活組織を維持するような「創造的個人」にはなれない。ウラデックは，彼の回りの古い社会生活が急速に解体していきつつあることを目前にしながら，さりとて未だに個人的理念に基づく新しい生活組織を構築することもできない状態におかれてきた[22]。

このような過程で，ウラデックは，いつも経済的関心を他の関心よりも卓越させている。なぜなら，経済的な安定性がなくなると，彼は望み通りの社会的応答を得られないからである。彼は，つねにカボティニズムを失わず，上層階級へ上昇しようとして，上層階級の態度に同化しようとする。こうしてウラデックは，ドイツでも上役に取り入ることに成功した。外国人とうまくつきあえるようになったことは，彼が自らの人生航路の中で開発した方法の効力を実践的に証明するものであった。伝統的な農民の応答力は，同等者の間でのものであり，特別の努力を必要としないのに対して，ウラデックのそれは，目上の人からの応答を獲得する能力であり，彼自身の経験

の中で培われたものである[23]。

そこでウラデックは，あらゆる関心――性的，道徳的，知的関心――を次第に経済的関心に従属させながら，「フィリスティニズム」を定着・増大させていく。たとえ彼の「新しい経験を求める欲求」がいかに強力であっても，それは，最終的には「安全を求める欲求」に取って代わられる。トーマスとズナニエツキは，その理由を２つ掲げている。第１に，ウラデックのような階級の人にとって近づき得る「新しい経験」の内容は限られている。彼は，アメリカにきたことでそれほど多くの新しい経験を実際にしたわけではない。もちろん，あちこち旅行する機会と手段をもつか，あるいは社会的同調主義に縛られずに犯罪者になるかしたら，この文化段階の人でも新しい経験の持続は可能ではあるが，ウラデックにはそれはできなかった。第２に，「放浪生活」（vogabonding life）には，無数の不愉快な経験，特に屈辱と身体的な不快さが伴う。初期の家族的態度や規則正しい生活体験がなかったら，ウラデックもそれに慣れてしまったかもしれないが，現実にはそうならなかった。こうして彼は完全なボヘミアンにはなれず，定住を余儀なくされる。だが，生活組織と社会体系への適応の能力を開発してこなかったため，彼にはフィリスティニズムの中でも最も低い類型――最小の努力しかいらない「経済的フィリスティニズム」――しか許されていなかったのである[24]。

《注》

1）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）。本書の基本的な方法については，矢沢修次郎（1984），水野節夫（1979－a），同（1979－b），パーク（1931），ブルーマー（1938），ズナニエツキ（1938），桜井　厚（1983），秋元律郎（1989）等。

2）トーマス（1938）p 229～230。

3）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）２巻 p 1878。

4）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）１巻 p 46～47。

5）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）２巻 p 1162～1163。

6）ブルーマー（1938）p 210，矢沢修次郎（1984）p 176～177。

7）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）１巻 p 457～458。

8）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）１巻 viii ・２巻 p 1128。

9）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）１巻 p 56～57。

10）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）２巻 p 1882～1884。

11）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）１巻 p 83。

12）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）１巻 viii ・２巻1128。

13）トーマス（1909）p 169。その他，初期トーマスについては，水野節夫（1979－b）。

14）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）２巻 p 1128～1129。

15）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）第５冊 p 340～341。

16）トーマス・ズナニエツキ（1918～20－a）２巻 viii ・ p 1651。

17）ブルーマー（1938）p 214。

18）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）２巻 p 1909。

19）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）２巻 p 2228・2234～2236。

20）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）２巻 p 2237～2238・2047。

21）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）２巻 p 2238。

22）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）2巻p1910～1911・2242・1853～1854・2240・2010～2011。

23）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）2巻p2230・2120・2234・2149。

24）トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）2巻p1908・2240・2243～2244。

第4章　パーク「移民における『人種偏見』と『マージナルマン』」の理論

1920年代のシカゴ学派における移民問題のいまひとりの代表的な研究者として，R. E. パークがいる。パークは，主にアジア人移民を対象に多くの論稿を遺し，独特の社会学理論を展開した。

まずパークは，人口の地域的移動（movement）・移民（migration）の増大を，貨幣がもたらした非人格的関係に基づく産業組織の拡大と手を携えて進むものと措定した。パークによれば，特に近代の科学技術や交通手段の発展は，生活水準の地域的格差を鮮明にさせ，人々の移動・移住を必然的に増加させた。同時にかかる移動・移住の増大は，人々の教育や読書力，生活諸関心の増大とそれへの貨幣経済の拡大等々によっても，それが社会関係を非人格化する傾向にある限り，支えられているのである[1)]。

ところで，このような近代の移住（migration）は，中世以前のそれとは質的に異なっている。すなわち，中世以前の移住は種族全体の移住であり，他民族の強制的排除を伴っていた。これに対し，近代の移住はよりよい生活条件を求める個々人の私的な関心に基づくものであり[2)]，それゆえ移住先での社会的孤立化や新たな文化との接触に伴う葛藤・人種的対立を必然的に引き起こすのである[3)]。

そこでパークは，かかる人種的対立の問題にアプローチする。パークによれば，人種対立の基底には，何よりもまず「人種的偏見」（race prejudice）がある。例えば，カリフォルニアに定住した初期の日本人移民の多くは，アメリカ人と運命をともにし，子供をアメリカ人として育てようと考えてきた。しかし今や彼らは，自分の考えが「甘かった」ことを知り，未来に不安を感じている。日本人移民の地位を低下させ，彼らを人種的ゲットーに追いつめたのは，アメリカ人の情緒の底を流れる根深い敵対感情であった。アメリカ人の心に潜むこの「偏見」により，日本人は，たとえ法律的に市民であっても，社会的にはアウトカーストとして排斥されるように運命づけられたのである[4)]。

このような「人種的偏見」の本能的要素は，見知らぬ人に対する根源的な不安と恐怖の反応である。ただし，こうした本能的反応は，本来，他者と交流し，理解しあう過程で解消するものであり，そうでない場合にのみ，それは「偏見」へと結晶化する[5)]。

パークは，この本能的反応を「偏見」に結晶化させる重要な契機の一つを，経済的な利害対立に見いだした。アメリカへの移民は，いうまでもなく，故国において恵まれなかった自由と経済的利益を求めてきた。いわば移住は，移出国と受入国の間の生活水準の格差に基づいて発生したのである。したがって，受入国では，生活水準の異なる移入民と本国人との競争が引き起こされる。この競争が無制限に行われると，本国人の生活水準の低下や移入民と競争する職業からの駆逐がもたらされる。そこで既住者は，「人種的偏見」をふりまくことで移民の流入を阻止し，民族間の無制限な自由競争に歯止めをかけようとする。その意味で「人種的偏見」は，人種間の経済的競争によって生じた反感の表現であり，その背後には，たとえ意識されていなくても，利害対立とそこで自らを防衛しようとする本能的衝動が存在するのである[6)]。

このような経済的競争関係に伴う「偏見」の結晶化を，パークは，白人の偏見が，アジア人の中でも特に日本人に対して強いことに見いだしている。日本人移民は，「黒人や中国人のように，カースト的規則になかなか服しようとせず，その分に甘んじようとしない」。彼らは，「集団的に組織され，集団の目標にむかって邁進する能力」をもち，上昇志向が強い。しかも彼らは，「国民的プライドをもち，その能力に対する自信に裏打ちされた民族的エゴティズムをもつ」。このように日本人が「アメリカ人にとって恐るべき競争相手であるところに，日本人に対する偏見のでてくる秘密がある」。また日本人移民に対する偏見が特に著しいのは，実際に日本人と白人との経済的競合関係が最も顕著な地域，階層においてである[7)]。

ところで，以上のように経済的競争関係が「偏見」の結晶化に大きな役割を果すことが事実であるとしても，「偏見」を生み出す契機はそれだけではない。また個人レベルの経済的競争関係が，なぜ「人種的」枠組で発現するのかという問題は，依然として残る。これらの問題を考えるとき，パークは，「人種的敵対」と「人種的偏見」とを区別することが重要であると考えた。パークによれば，人種的敵対は変動や進歩があるからこそ発生する。例えば，黒人がアメリカで出会う敵意の程度は，まさに彼らのアメリカにおける進歩の度合でもある。人種的敵対がおさまるとき，敵意はなくなる。しかしながら敵意の基盤である「人種偏見」はしばしば生き続けるのである[8)]。

そこでパークは，人種的偏見をかきたて，不安や恐怖のシンボルになるものとして，外見的な印（mark）に注目する。その印は，身体的なものだけではない。身体的な差異は，衣装や作法，態度や振舞い，顔付き等々の特徴的な表現によってさらに強調されるのである。中でも，自分自身を作り上げる作法，礼儀，ものの考え方等，習慣や伝統のありかたの違いは重要である。例えば東洋人は，より人目を意識し，伝統・礼儀作法を重んじる。西洋人の率直さは，東洋人にとっては無作法・無礼にほかならない。だが，こうした東洋人の礼儀作法は，個人主義・民主主義の社会にはなじまない。そこで西洋人は，彼らを誤解し，因習に対する遵奉を陰険で狡猾だと考える。多くのアメリカ人は，最初は日本人召使の丁寧さを喜ぶが，後には，「日本人は何を考えているのか全くわからない」と非難するようになるのである[9)]。

しかし，それでもまだこのような文化的慣習は変化しうる。現にアメリカ在住の東洋人は，情緒や態度の面で大きな変容を経験している。しかし彼らは，その身体的特徴を変えることはできない。パークによれば，アジア人や黒人は，カラーその他，脱ぎ捨てることのできない「人種的ユニフォーム」を身につけている。このことが必然的に人種を分離し，人種的葛藤を拡大・強化するのである[10)]。日本人が西洋人に比べてそれほど簡単に「同化」（assimilation）しないのも，彼らの精神性のためというより，むしろ「人種的ユニフォーム」のためである。日本人は，大量のコスモポリタン的な人々の中で匿名の一個人になることはできない。彼らは，ひとつのシンボル――「黄色い危険」と呼ばれる漠然としたシンボル――の維持を運命づけられているのである[11)]。

そこでパークは，日本人や中国人が，つねに，個人としての人格ではなく，「日本人，中国人という人種の成員」として理解されることを指摘する[12)]。平均的なアメリカ人には中国人はすべて同じにみえる。それは，一人一人の人格が人種的類型の背後に隠されるからである[13)]。こうした人種的類型化は，目の前にいる個人を自分と同じ人間として理解することを排除し，非人格化させる。非人格化による理解の排除がさらなる人種的隔離を生む。こうしてアジア人と西洋人の競争は，個人間の競争から容易に人種間の競争・対立に転化するのである[14)]。

またパークは，このような類型化を移民の側にも見いだす。アメリカへの移民は，生枠のアメ

リカ人に対して，自意識が強く，打ち解けない。これはまさに悪循環である。人種的相違が顕著であるほど移民の人種的な自意識は強くなり，アメリカ人との社会的距離も大きくなり，偏見が助長される。その意味で，孤立化は偏見の結果であると同時に原因でもある[15]。パークは，特に身体的特徴のあるアジア人が，彼ら自身の中でも，また社会の中でも，人種意識を強めざるを得ず，この人種意識が逆に人種的疎隔をうみだし，アジア人移民を孤立化させることを指摘している[16]。

現にパークの調査によれば，アジア人を初めとする外国人移民は，大都市の移民居留地で人種的に孤立化して生活していた。これらの居留地は，それぞれ独自の政治的・社会的組織をもち，国家主義的宣伝の中心地となっている。またここには母国語の新聞があり，例えばニューヨーク市には23の外国語で印刷された270種の刊行物があった。さらに都市的環境の下で「近隣」は意義を喪失しつつあるが，移民居留地では，その親密性や連帯性が民族的敵対関係の中で維持・強化されている。このような条件があるからこそ，各民族の移民は，たとえ共通の経済を営む上である役割を果しながら生活していたとしても，ほとんど混血や同化をせず，故国から持ち込んだ社会的慣習や道徳的秩序を長い間維持できるのである[17]。

だが，パークによれば，移民は単に故郷の文化・伝統を維持するだけではない。移住（migration）は，移動（movement）とは異なり，伝統的な家族的紐帯の破壊を伴うのである。ジプシーや遊牧民，渡り労働者やホテル生活者の移動は，昔からの種族組織や慣習を維持したままの移動である。これに対し，移住は，新たな文化との接触や衝突の結果，伝統的な社会組織を崩壊させ，「個人的人間」を解き放つ。この過程で諸個人は啓発され，コスモポリタンになるのである。彼らは，生まれ育った世界を「異邦人」（stranger）が抱く距離間をもって眺めるようになる。「異邦人」は滞在するが定着はしない。彼らは自由な放浪者であり，自らの行動を，地域に固有の慣習や慣例ではなく，より一般的で客観的な水準に照合して行うようになるのである[18]。

＊こうしたパークの「異邦人」（stranger）概念には，ジンメルの「よそ者」（Fremde）概念が強く影響している。ジンメルによれば，「放浪者」（Wandernde）と「よそ者」とは異なる。「放浪」が一定の土地からの解放であり，一定の土地への定着と対立するのに対し，「よそ者」は前者と後者の統一である。「放浪者」が「今日来て明日去る」人であるとすれば，「よそ者」は「今日きて明日とどまる」人であり，いわば「潜在的な放浪者」である。そして「よそ者」は，「根っから集団の単一の構成要素や一面的な傾向につなぎとめられていないので，すべて集団に対して客観的であるという特殊な態度」をもって接するようになるのである[19]。

そしてパークは，こうした移住に伴う「個人的人間」の創出が，従来，神聖化されていた社会諸関係の世俗化を推し進めることを指摘する。アメリカにおける様々な民族の移住，そして特に人種や文化の坩堝としての大都市の成長は，地域的な孤立的紐帯を緩め，種族や民族の固有の文化を破壊しつつある。旧来の氏族や親族集団，地域的紐帯が崩壊し，合理的な関心や気質的な好みに基づいた都市の自由が登場する。種族の慣習という神聖な秩序が，文明という合理的な組織にとってかわられつつあるのである[20]。

とはいえ，こうした個人の解放や社会の世俗化は，必ずしも平坦に進むわけではない。移民は，故郷を捨て，見知らぬ国で自分の運命を探求しようと努力する過程で，かなり永続的な危機の時代を経験し，1つのパーソナリティー類型――「マージナルマン（Marginal Man）」――になる。パークによれば，マージナルマンとは，2つの異なる民族の文化や伝統を共有する文化的雑種で

ある。彼らは，決して進んで自分の過去や伝統を破壊しようとはしない。だが人種偏見のために，自分が住もうとしている新しい社会で全面的に受け入れられることもない。彼らは，完全に溶け合うことのない２つの文化，２つの社会の境界で生きる。彼らは，いずれの文化世界においても優れて「他所者」――異邦人――なのである[21]。

こうした２つの文化の葛藤が移民の心の中で生じるとき，それはまさに「分裂した自己」，古い自己と新しい自己との葛藤になる。パークは，移民の中に，道徳的に二分され，その間で葛藤するという感覚を見いだす。古い習慣は捨て去られ，新しい習慣はまだ形作られていない。それは常に，内的な騒擾と強烈な自己意識の時代である。彼らは，自ら捨て去ったゲットーの安らかさと未だ全く慣れていない外界の冷えきった自由の間を，落ち着かなく揺れ動く。そしてかかる葛藤が満足のいく形で終わる場合は稀で，しばしば深遠なる幻滅感で終結する。そこでマージナルマンは，精神的に不安定で，自己意識が強く，くつろぐことがなく，そして何かいつも気分が優れない。新たな文化と接触することで生じる道徳的な騒擾は，まさにマージナルマンの心の中に最も明白な形で現れるのである[22]。

パークは，このような「マージナルマン」的人間類型が，移民二世に一層鮮明に再生産されることを見いだした。二世は，一方で，大きな文化変容を遂げている。アメリカで生まれた中国人二世は，率直ですぐ人と親しくなり，彼らの両親と同様の人生を歩きたいとは全く思っていない。日本人の新旧世代の断絶はそれほど急激ではないが，それでも日本人二世はアメリカ精神に染まり，都市の自由な空気に憧れ，両親の野望であった農場経営に魅力を感じない。しかし他方，このような二世のアメリカ化の過程は，彼らが，アメリカ社会で一般に認められている東洋人に対する軽蔑的評価を受け入れることと表裏一体の関係にある。そこで彼らは「責めさいなむ劣等感」を抱き，「私は自分の人種が憎い。私は自分自身が嫌いだ」と感じるに至る。こうして「東洋と西洋の対立」は「個人の内的精神的対立」の様相を帯びてくる。彼らは「こなごなにされた自我の諸要素」をどう結び合わせ，どう生活感情の統一を確保するかという問題に直面するのである[23]。犯罪調査によれば，二世では，移民初代より犯罪率が高く，また移民特有の犯罪から生粋のアメリカ人の犯罪傾向により近づく。しかも彼らには，生粋のアメリカ人以上の犯罪が多いのである[24]。

しかしながら，それにもかかわらずパークは，「接触→競争→対立→適応→同化」という過程を，人種関係の周期的循環，必然的な歴史的過程と把握した。その意味でパークにとって人種問題とは，少なくとも一面では，異なる人種の人々が出会い，理解しあい，人種の障壁を崩し去ることができるか否かというコミュニケーションの問題であった[25]。またパークは，移住が，究極的には様々な民族の人種的特徴をも決定すると考えた。同一の経済を共有し，共に暮らしている民族や人種間で混血が進むのは結局は避けがたく，それは気質や身体的特質の諸変化を伴うのである[26]。したがってパークにとって，「同化」（assimilation）こそが，人種関係の理論的帰結・実践的目標にほかならなかった[27]。

しかもパークは，このような「同化」が，それ自体，人類史に決定的な進歩的意義を刻印してきたと指摘する。人種が隔離と同種血統の所産であるのに対し，文明は接触とコミュニケーションの結果である。人々を文明化してきた様々な力の中の最も重要なものとして，パークは，人間の移住とそれに付随して生ずる人々の衝突，葛藤，混乱，さらにそれらが引き起こす諸々の文化融合・人種の新たな雑糅を掲げた。「文化の進歩はすべて，いわば，放浪の新しい時期とともに始ま」った。その意味で人種的孤立政策は，近代生活のより深い潮流のすべてに逆行するとパー

クは考えたのである[28)]。

ここでパークのいう「同化」とは，複数の民族が相互浸透・融合し，少なくとも一つの国民的存立の根拠を維持するに足る文化的一体性を創出する過程である[29)]。ただしそれは単純な同質性の獲得ではなく，諸部分の差異に基づき，それぞれの文化の異質性を認めあいながらも，諸部分が相互に依存する関係を作り出すことである[30)]。そして究極的には，「同化」とは，民族的集団のメンバーの外的標識がめだたなくなり，また民族的集団の孤立性が破られることによって，個人が彼の属する伝統の拘束から「解放」され，個人的能力を伸ばす「余地と自由」が与えられることである[31)]。パークは，この「同化」こそ，移民国家としてのアメリカがとるべき道であると考えたのである。

《注》

1）パーク（1916）p 71，同（1926－a）。なおパークの移民研究の基本的方法については，矢沢修次郎（1984），家坂和之（1972），秋元律郎（1984），同（1989），好井裕明（1984），藤田弘夫（1990），佐藤智雄（1975），ウィルソン（1981）。

2）パーク（1928－a）p 97～99。

3）パーク（1917）p 886。

4）パーク（1926－b）p 46～47・38～39。日系移民の制限と排斥運動については，キタノ（1969）p 47～48，児玉正昭（1981）p 89～90。中国系を含め，東洋系移民の排斥運動については，クォン（1987）第1章，油井大三郎（1989），カナダにおける東洋人排斥については，新保　満（1989）第5章。

5）パーク（1917）p 227・229。

6）パーク（1917）p 227，パーク・バージェス（1921）p 620。こうした実態については，ルイス（1978）p 16～17・21。

7）パーク（1917）p 223～229。こうした実態については，キタノ（1969）p 221・28～39。

8）パーク（1928－b）p 70。

9）パーク（1926－b）p 42～43・49～52。

10）パーク（1917），同（1923），同（1926－b）p 52～55，同（1928－a）p 106。

11）パーク（1917），同（1914）p 227～228，同（1928－a）p 106～107。

12）パーク（1923）。

13）パーク（1926－b）p 42～43。パークは，この類型化が日本にもあることを指摘している。アメリカで生まれ育ったある日本人女性は，パークから見ると，ささいな身振り・アクセントも含め，完全に「日本人の変装をしたアメリカ人」だった。彼女は日本に帰ろうと思っていたが，実際に帰ってみると，日本にとどまるのは不可能だと感じた。日本人は，彼女を「アメリカ人の仮面をつけた日本人」として，好奇の目でみたのである。パーク（1926－b）p 46。

14）パーク（1923）。

15）パーク（1926－b）p 57。

16）パーク（1923），同（1917）。

17）パーク（1916）p 79・64，同（1928－a）p 106～107。こうした点については，松本悠子（1984）p 8～9，ガットマン（1976）p 38～41・60～64。またアジア系移民の基本的特徴については，角山栄（1981）。

18）パーク（1928－a）p 99～102。

19）ジンメル（1908）p509，阿閉吉男（1979）p48・145～146，同（1981）p82・94。
20）パーク（1928－a）p102～106。
21）パーク（1928－a）p111～112・108～109。
22）パーク（1928－a）p110・111～112。
23）パーク（1926－b）p51～52・47。この点についてはキタノ（1969）p142。同様の葛藤がイタリア系移民にもみられたことについては，山田史郎（1982）p39。
24）パーク（1916）p80～81。
25）パーク（1928－a）p106，同（1926－a）。
26）パーク（1928－a）p93～94・107～108，同（1916）p79～80。
27）パーク・バージェス（1921）p664～665・735。
28）パーク（1928－a）p92～93，同（1926－a）。
29）パーク・バージェス（1921）p664～665・735。
30）パーク（1914）p207。
31）パーク（1917）。

第５章　グラムシ「イタリア人移民・出稼労働者」に関する断章

最後に，アメリカをはじめ世界各地に大量の移民・出稼労働者を輩出していたイタリアにおけるA.グラムシの研究蓄積を考察しよう。ここで取り扱うグラムシの研究には断片的なノートが多く，必ずしも体系的な出稼・移民論が提示されているとはいえない。しかしそれらを総合すると，次のような論理が読み取れる。

まずグラムシは，移民（emigrazione）を含む「人口論的変動」（movimento demografico）を，農民と農村の生活に関する「研究のための基準となる諸要素」のひとつと位置づけた[1)]。

その上で彼は，こうした農民の移住（emigrazione）をイタリア資本主義の特殊性と密接に絡み合った存在として把握する。他の資本主義国では，工業資本が土地資本との均衡体系を形成し，立憲民主制国家をゆっくりと体系化してきた。ところがイタリアでは，国家権力が，しばしば不健全すぎるほど工業資本の発展のみに関心を集中させ，農村を略奪し，肥沃な土地も不毛な土地に変え，そしてこれによって創出された貧困が，まさに農民の移住を余儀なくさせたのである。しかも貧しい農業人口の移住の結果，イタリアの資本家は，地主とそれほど対立せずに，必要とする労働力を十分に確保することができ，そこで資本家と大地主との間に経済的妥協が行われ，他の諸国のような指導階級の交代も起こらなかった。同時にイタリアの移民と農民は，資金面でもイタリア資本主義を支えてきた。イタリアの国家権力は，利付債券の発行により，農民と移民から預金をかき集め，それを工業企業家に与えてきた。以上のようにイタリア資本主義は，何よりも大量かつ不断の海外移民・移住やこれに伴う人口減少を不可欠の基盤として発展してきた[2)]。イタリアの移民は，まさに資本主義導入が「国民的な観点からなされなかったこと」の帰結である[3)]。「実際，移民（emigrazione）は一方で絶対的失業の現象とみなされねばならず，また他方では就業している労働者に対して自国を捨てることに伴う危険や犠牲の方を選ばせることのないような他国なみの生活水準を国内の経済体制が保障しなかったという事実の表現とみなされなければならない」[4)]のである。

グラムシは，ここにイタリア「帝国主義」の特殊性を見いだした。普通，帝国主義は金融資本

の輸出を伴うが，イタリア「帝国主義」は，イタリア人労働者を海外に移民（emigrazione）させ，他国の資本家の利潤のために働かせている。つまりイタリアは，他国の金融資本が海外進出するための道具にすぎないのである[5]。この特殊性は，イタリアとドイツの移民（emigrazione）を比較すると明白になる。確かにドイツでも，当初は，工業の発展が大量の移民（emigrazione）流出を引き起こした。しかし，後の時期にはそれを終わらせただけでなく，その一部を再吸収し，著しい移民（immigrazione）流入をもたらした。しかも，当初，ドイツから流出した移民は「工業幹部」であり，熟練と資質を備えた一定の人的資本が金融資本と一緒に流出したのである。その意味でドイツの移民は，資本家の能動的エネルギーの一定の過剰の反映であり，移動先諸国の経済を豊かにさせた。ところがイタリアの移民は，さらに初歩的で受動的である[6]。

＊もとより，発展途上国へのイタリア人移民（immigrati）の場合，その意義と様相は大きく異なる。グラムシによれば，ベルギー領コンゴには1600人，中でも最も豊かな地帯であるカタンガには942人のイタリア人移民がおり，その大部分は，技師・会計士・棟梁・現場監督の資格で民間会社に勤めている。国家や会社の負担でコンゴで就労する200人の医師のうち3分の2はイタリア人である[7]。またエジプトにおけるイタリア人居留民（colonia）も非常な選良である。彼らは，既に第3世か第4世に達し，プロレタリア移民（emigrato）から実業家・商人・自由業者へ移行している。しかも彼らは民族的特色を維持し，イタリアの通商上の顧客を増加させている。ここでは治外法条款が居留民に民族的統一を与え，イタリア人官吏及びブルジョアが移民全体をそっくり支配することを可能にしているのである。しかしながら，治外法権条款が廃止されている地中海諸国では，イタリア人移民（emigrazione）は中止され，または少しずつ排除され，あるいは移民の元の国籍を捨てさせる試みがなされている[8]。またこうした熟練・技能を有した移民は，前述のごとく，イタリアの移民の中では極めて少数である。

そこでグラムシは，イタリアにおいては，移民（emigrazione）という現象が，農業・農民にとって次のような意味をもっていることを指摘した。

第1に，移民（emigrazione）は，マラリア，匪賊，未墾地，ペッラグラ，文盲等とならんで，イタリアにおける農民生活の「災い」・生活苦難のひとつにほかならない[9]。

第2に，移民（emigrazione）は，農民層の現実の生活を維持するひとつの手段でもある。農民は，何年間か海外へ出稼（emigrazione）に行ったり，「鉱山」へ働きに行ったり，あるいはまた大地主の召使を何年間かしたり，つまり「精出して働いて」ためこむことによって，必要な資金を蓄える。そこが，「食うや食わず」の「過激な」日雇い労働者と違うところである[10]。また南部のように移民によるはけ口を見いだせなかったポー河流域では，他の経済外的規制もあって雇農層が創出された。このことは，リソルジメントの間，ポー河流域の雇農層が恐ろしい貧困状態に見舞われることを結果したのである[11]。

そして第3に，移民（emigrazione）は，イタリア資本主義の不可欠の一環をなす農業制度・地主階級に対する「無言の批判」である。農民の離村（esodo）に対する嘆きの原因のひとつは，地主の利害，即ち，農村における賃金の上昇にある。離村に伴い，都市工業との競争が激しくなり，また生活がより「合法的」になって農村生活の日常を織りなす横糸である専断と専権にさらされることが減少するからである（＊）。農民の国外移民（emigrazione）も，工業諸国に向けた離村（esodo）の国際的形態といえる。農民が他国に行って農民として生活水準を向上させるこ

とは，イタリア農業制度への現実的批判にほかならないのである[12]。

＊グラムシは，こうした農民と資本主義的都市の同盟が，イタリア史の伝統と結びつくことを指摘している。生成期のブルジョアジーは帝国と地方的封建主義に対抗して農民のうちに同盟者を求めた。ブルジョアは豊富な労働力を必要とし，それは農民大衆からのみ得られた。これに対し，貴族は農民を土地に縛りつけようとした。農民の都市への逃亡（fuga）。異なった状況にあるとはいえ，コムーネの時代に，都市の指導的要素としての役割が，即ち，農村の内部的対立を深化させ，封建主義を打倒するための政治的――軍事的手段としての都市の役割が現れたのである[13]。

以上の認識をふまえ，グラムシは，どの移民（emigrati）も，イタリアを去る前にすでに自分の中に一つの「ドラマを秘めている」と指摘した。オイエッテイが主張するようにイタリアの文学者たちが外国移民（emigrazione）に関心をもたないのは確かにおかしいことだが，同時に，移民にでかける前の移民や彼に移民することを強制した諸条件，すなわち外国へ行く前にすでにイタリアで集団移民を意味したはずの涙や血に関心をもたぬのも，同様におかしいことである。イタリアには，移民を経済――社会的現象として取り扱った出版物はどの時代にも多く存在したが，芸術文学はその問題に応えていない。現実のイタリア移民とそれを迎え入れる国々の住民との対立を描くためには，何よりも受入国とイタリア人自身とを知らなければならないのである[14]。

ところでグラムシは，以上のような長期にわたる大量の移民の移動が，結果的に，移民（emigrazione）を流出させるイタリア社会と移民（immigrazione）を受け入れるアメリカ等の社会の双方に，様々な矛盾を刻印することを指摘した。

まず第１の矛盾は，移民に伴う人口構成の不均衡と民族問題の生成である。

イタリアにおいては，移民（emigrazione）流出の結果，「潜在的」就業人口と不就業人口の比率がヨーロッパ中で最悪になっている[15]。また大量の男子人口が海外に流出するため，老人，婦人，幼児，病人が国内に残り，勤労大衆の負担が増大している。これらはイタリア資本主義体制の基本的な弱点であり，したがってイタリア資本主義が急速に衰え，滅びていく運命を基礎づけている[16]。

他方，移民（immigrazione）の受入国であるフランスやアメリカでは，若年世代・労働世代が外国人移民によって肥大している。そしてこのことが「土台を変え」つつあり，在来者に対しては熟練職種と管理・組織化の職務，移入者に対しては非熟練職種という人種的分業を創出している[17]。特にアメリカではこの問題は深刻である。アメリカには伝統的な知識人がいなかったため，有機的知識人と伝統的な知識人を融合させるのではなく，様々な民族の移民（immigranti）がもたらした異なる型の文化を単一の国民的坩堝のなかで統一的文化に融合しなければならなかった。しかもアメリカにおける各民族文化の融合は決して対等平等なものではなく，アングロサクソン移民（宗教的政治的亡命者としての最初の移民）を知的・道徳的エリートとして行われるのである[18]。

第２の矛盾は，このような民族問題・民族的葛藤の生成の中で，労働者階級内部に民族主義・ナショナリズムが生起していることである。

特に移民（immigrazione）によってその民族的構成が与えられたアメリカでは，移民制限の主張が労働者階級によって積極的に展開された。1882年には中国人労働者の入国が禁止され，1907

年の協定で日本人移民も大幅に制限された。そして1921年の法律により，各国の移民の年間割当は1910年の国勢調査による各国出身アメリカ市民の３％に制限され，黄色人種の移民は決定的に排除された。アメリカ国民の均質性を確保するための移民の規制は，実は，民族問題だけでなく，産業革命とも関連していたのである[19]。さらにアメリカでは，イタリア人移民に対する圧力も強まっていた。地中海人は劣等な人種であり，彼らの移民は一つの危険である。それは武力征服より悪質で，ニューヨークと合衆国の大部分とを「人種の掃だめ」に変えている。このような考えが，合衆国の世論の優勢な潮流を反映していた。この潮流によれば，新たな環境が移民（emigranti）に及ぼす影響は，移民大衆が新たな環境に及ぼす影響よりも一層重要でなくなり，「異種族間の雑婚」の基本的特徴は，初期の諸世代では民族間の肉体的・精神的調和（統一）の欠如，以後の諸世代では様々な祖先の型への緩慢ではあるが宿命的な復帰である[20]。

他方，イタリアの側でも，移民（emigrazione）問題は民族主義を喚起させていた。ナショナリスト党はまだ不分明なグループではあるが，その第１回大会は対外政策と移民問題を中心的に取り扱った[21]。また一般に多くの知識人サンディカリストが移民の多い南部の出身であり[22]，こうしたサンディカリズムの危機とサンディカリスト指導者のブルジョア陣営への漸次的移行も，その基本的動機は，南部主義と緊密に結びついた移民と自由貿易の問題であった。例えば移民事業を契機として，エンリコ・コルラディーニは「プロレタリア国民」の観念を創出し，リビア戦争を資本家・財閥の世界に対する「偉大なプロレタリア」の攻撃開始と位置づけた。ジョヴァンニ・パスコリの政治的傾向も，「プロレタリア」概念を階級から民族に移しているコルラディーニの教義と結びついていた。彼らは，南部問題の解決を植民地拡大に求めたのである[23]。

そして第３に，グラムシは，移民（emigrazione）流出が，イタリア文化・イタリア人の思想そのものに様々な矛盾を刻印することを指摘した。

すなわちまず絶えざる移民流出は，イタリア文化に「移民的性格」（immigratorio personale）を刻印する。フランスの場合，すべての国民的エネルギー，特に知識人のエネルギーの調和的発展が巨大な知的建築物を構築してきた。これに対してイタリア文化の機能は，個人主義的でばらばらな「移民的性格」をもち，国民の基底にむかって流れてそれを力づけるのではなく，かえって，がっちりした国民的基底の建設を不可能にしている[24]。ドイツの移民（emigrazione）は有機的であり，即ち，労働者大衆と一緒に工業的組織的諸要素が流出した。ところがイタリアでは，工業的にも知的にも圧倒的に未形成の労働者大衆のみが流出し，知的な諸要素は残るが，彼ら自身もまた未形成であった。そこで知識人の恐るべき失業が生み出され，このことは経済的反映を伴ってあらゆる一連の腐敗と政治的・道徳的解体現象を引き起こした。また，国家装置そのものが傷つけられ，特殊な性格を帯びた。こうして諸対立は消滅するかわりに熾烈化し，これらの発現がいずれも諸対立を深めることに寄与したのである[25]。

しかも移民（emigrazione）流出は，イタリア民衆に，「アメリカ神話」という一つのイデオロギーを醸成した[26]。家父長的な農民や階級闘争にひきこまれていない労働者等のイタリアの庶民にとって，ウィルソンは，アメリカの富の，自由な労働の可能性の生きたシンボルとなっていた。すでに昔に移民したか，または移民すれば個々の問題が解決できると考えているイタリア人民の精神の中で，アメリカは幸せの象徴であり，ウィルソンはその生きたシンボルであった。大部分のイタリアのプロレタリアートが，ウィルソンやアメリカを国際対立の仲裁人と考え，どんな自主的・階級的なイニシアティヴも，ウィルソンやアメリカに従属させてかまわないと考える理由はここにあった[27]。

以上のようにグラムシは，移民移動が，出身地と移動先の双方に様々な葛藤・矛盾を刻印することを指摘したわけだが，ここで特に注意すべきことは，第1次大戦以後，イタリアでは，このような移民（emigrazione）流出自体が急速に減少しつつあったという事実である。戦前には年間約130万人の労働者がヨーロッパを離れていたが，1920年代後半には60～70万人の人間が移民するにすぎなかった[28]。

グラムシは，こうした移民（emigrazione）の減少を，イタリアに残された勢力が「正常な」諸国の生活水準と同等の生活水準をもつ，拡大される工業の枠組に吸収された結果ではなく，むしろ，正常な経済力を上回る国内予備軍がすべての工業国に存在するという世界的危機の結果であると把握した。全世界に対して労働予備軍を生産するというイタリアの機能が終わったのは，イタリアがその人口的均衡を正常化したからではなくて，全世界がその人口的均衡を混乱させたからなのである[29]。こうして世界資本主義がイタリア人移民を吸収しなくなり，イタリア資本主義が抱えておくことのできないイタリア人労働者を搾取しなくなると，それだけ一層急速にイタリア資本主義は衰えざるをえない[30]。グラムシは，イタリアの経済危機の諸要素を次のように規定している。伝統的にイタリアの予算の黒字を形作っていた移民の送金と外人産業が瓦解し，残る輸出も危機を被っている。これに不作による穀物輸入の必要が加われば，来るべき数カ月の展望は明らかに破局的である[31]。しかも移民の減少とそれによる人口圧力の増大は，ファシスト国家の財政政策ともあいまって，南部農村の危機をもたしているのである[32]。

そしてグラムシは，こうしたイタリア資本主義体制の全般的危機が，ファシズム制度によっては解決されないと主張した。ファシズム制度の下，イタリア人民の生活の可能性はむしろ減少している。海外移住の困難のために人口圧力が増大したまさにその時期に，生産設備の縮少が起こっている。収縮した産業設備が完全に崩壊しなかったのは，賃金切り下げ，労働時間延長，物価高等による労働者階級の生活水準の引き下げのためであった。このことは，熟練労働者の移住を引き起こした。つまり最も重大な国民的富のひとつである人的生産力を疲弊させた[33]。少なくともファシズム政府は，移民の送金をふやし，外人産業を繁栄させる上でほとんど無策であった[34]。戦前1年に25万人の絶望的な境遇の人達を国土から移住させ，その送金額7億をイタリアの収支決算上に占めていた移民団を再組織することは，政府にはできなかったのである[35]。

またグラムシは，第2インターナショナルも，イタリアのような国が陥っている危機の3分の2を生じさせている移民の流れの停止を解決することはできないと指摘した。アムステルダムの事務局は，移民の防衛のために何もなしえなかった。それは無用どころかプロレタリアートの利益にとって有害な国際組織になっていたのである[36]。

こうしてグラムシは，移民減少に示されるイタリアの経済条件そのものの中に共産主義の源を見いだす[37]。そして直面する危機が共産主義革命以外では回避しえないと措定するとき，移民・移住に伴う農民と労働者階級との接触が極めて重要な意味をもってくる。工業労働者の力だけでイタリア革命を安定的かつ広範囲に確立することはできず，都市を農村に結びつけることが必要である。社会主義国家を構築し発展させる土台として，農村に貧農の諸制度をうちたてることが必要である。そしてグラムシによれば，こうした事業は，イタリアでは考えるほど困難ではない。なぜなら戦争中，極めて多数の農村居住の市民が工場に入ってきたからである。彼らの中に共産主義的宣伝の根を急速に育て，彼らを都市と農村の結合剤として役立てることが重要である。農村心理に関する彼らの深い知識と彼らが博している信用とを役立て，農村勤労者の広大な勢力を共産主義運動に組み入れなければならないのである[38]。

《注》

1）グラムシ（Q 8）p 202。なお，グラムシの移民論については，後 房雄（1990）p 102～103で触れられている。

2）グラムシ（1920－a）p 81～82，同（1926－c）p 230，同（1924－a）p 329。イタリアから世界各地に流出した移民数の変遷については，山田史郎（1988）p 246。またイタリアからアメリカへの移民が1890～1914年に約400万人に達したことについては，駒井 洋（1989）p 161。

3）後 房雄（1990）p 103。しかもこのことはイタリアの南部問題と重なっている。グラムシ（Q 10）p 240は，北部は「南部を犠牲にして，みずから肥えふとる『蛸』であり，その経済的――工業的発展は南部の経済と農業の貧困化に直接つながっている」と指摘している。

4）グラムシ（Q 19《7》）p 1992。後 房雄（1990）p 103。

5）グラムシ（1924－a）p 329～330。

6）グラムシ（Q 16《149》）p 250。

7）グラムシ（Q 24《146》）p 426。

8）グラムシ（Q 24《63》）p 355。

9）グラムシ（Q 24《79》）p 383～384。

10）グラムシ（Q 20）p 38～39。イタリア移民の約8割が一定期間の出稼労働後，故郷に帰ることを意図し，実際に相当数が帰国したことについては，彼らの帰国後の生活実態も含めて，山田史郎（1988）p 262～263，松本悠子（1984）p 3。また南部の中でも，比較的土地所有の集中度が低く，零細農家が多い地域に，移民流出が最も顕著であったことについては，山田史郎（1988）p 247。

11）グラムシ（Q 10）p 245，同（Q 16《44》）p 143～144。

12）グラムシ（Q 24《137》）p 421。移民流出に伴う伝統的村落共同体の解体，及び，新たな生活共同の形成については，山田史郎（1988）p 248～249。

13）グラムシ（Q 10）p 231，同（Q 16《44》）p 135～136。

14）グラムシ（Q 6《a》）p 307～308。

15）グラムシ（Q 5）p 21，同（Q 16《61》）p 172。

16）グラムシ（1924－a）p 330～331。

17）グラムシ（Q 16《62》）p 175。この実態については，ガットマン（1976）p 48～49。

18）グラムシ（Q 28－29）p 100。イタリア系アメリカ人に不熟練労働者が多かったことについては，山田史郎（1988）p 250～251，松本悠子（1984）p 4。

19）グラムシ（Q 24《16》）p 290・293。

20）グラムシ（Q 24《45》）p 329～330。なお出稼・移民制限の事例として，アンマでは傘下の工業に対し，フィレンツェ以南生まれの労働者を採用しないよう指令が出された。これは，移住（emigrazione）の失敗と，工場から逃げ出したシチリア人が近くの農村で犯す犯罪の増加と関係している。グラムシ（Q 16《50》）p 163。イタリア系アメリカ人における劣悪な労働条件，及び，伝統的価値観の維持等については，松本悠子（1984）p 4，山田史郎（1982）p 37・40～41，同（1988）p 251～255。

21）グラムシ（Q 24《25》）p 307。

22）グラムシ（Q 16《58》）p 168～169。

23）グラムシ（1926－b）p 204，同（Q 24《51》）p 337。

24）グラムシ（Q 28－29）p 96～97。アメリカにおいてもイタリア人移民は出身地方・市町村内部でのまとまりが強く，イタリア人としての統一が弱かったことについては，松本悠子（1984）p 3，山

田史郎（1988）p.253～256。そうした紐帯が徐々にイタリア人としての連帯に変質していく過程については，松本悠子（1984）p 3，山田史郎（1988）p 259。

25）グラムシ（Q 16《149》）p 251。なおイタリアの移民の出身階層は農民・農業労働者・一般労働者が圧倒的に多く，熟練職人や専門職が少なかったことについては，山田史郎（1988）p 247。

26）グラムシ（Q 16《24》）p 102～103。

27）グラムシ（1918）p 256～257。

28）グラムシ（Q 24《122》）p 409～410。イタリア移民は第１次大戦後減少し，1924年のアメリカ移民法から，大恐慌・第２次大戦にかけて激減した。この点については山田史郎（1988）p 257。

29）グラムシ（Q 16《149》）p 250～251。

30）グラムシ（1924－a）p 330～331。

31）グラムシ（1926－a）p 174。

32）グラムシ（1924－b）p 65～66。

33）グラムシ（1924－b）p 66。

34）グラムシ（1926－a）p 174。

35）グラムシ（1920－b）p 251～252。

36）グラムシ（1921）p 161。

37）グラムシ（1920－b）p 251～252。

38）グラムシ（1919）p 22。グラムシは，手工業を農村に戻すべきとのデメミケリスの主張を批判し，都市と農村の再結合が，手工業ではなく大工業を基礎としてのみ行われると主張している。農村に戻るのは手工業者ではなく，近代的労働者である。また農閑期の工業への利用は，市況の景気の波に左右されない計画経済においてのみ可能である。グラムシ（Q 24《137》）p 422。

終章　まとめにかえて

さてこれまで，19世紀末から20世紀初頭における代表的な出稼・移民研究の諸潮流――カウツキー，ウェーバー，トーマス＆ズナニエツキ，パーク，グラムシ――を概観してきた。

ここでまず特徴的なことは，これらすべての論者が，出稼・移民を，単に経済的な労働力移動として，すなわち，その原因を地域的経済格差に，その結果を差別的搾取に見いだすといった表層的把握にとどまってはいなかったという事実である。彼らはいずれも，出稼・移民を，何よりも，世界史的な社会構造変動，及び，その中で創出されつつある新たな人間類型・パーソナリティーの把握にとって不可欠かつ絶好の研究対象として位置づけていた。このような認知枠は，それ自体，これらの諸研究が，現代の出稼・移民研究の多くが欠落させている基本的な問題意識や分析枠組を，原初的な形ではあれ，すでに提起していたことを示している。

そこで次に問題になるのは，出稼・移民を生み出した世界史的な社会構造変動とそれを通して培われつつある新たな人間類型をいかなる質のものとして把えていたかという点である。この点に関して，グラムシ以外の論者の見解は基本的に一致している。すなわち，カウツキー，ウェーバー，トーマス，ズナニエツキ，パークは，いずれも，出稼・移民の増大を，資本主義発展に伴う必然的結果であると同時に，資本主義発展を一層促進する契機でもあると把握し，それゆえ，出稼・移民が，近代的自我・個人主義的人間類型の発展と相即し，伝統的な共同体の解体を推進するものとして把握している。

まずカウツキーは，最も明確に，農民・農業労働者の出稼や移住を，資本主義の発展に基づいて不可避的に進む賃労働者化の一環と位置づけ，また出稼・移民の流出が農民層分解を一層促進させることを指摘している。彼は，出稼先で賃労働を経験した農民層が，近代的自我・権利意識を成熟させ，農村において封建制の残滓を払拭する「進歩の最も有力な先駆者」，地主に対する「不満と階級憎悪の扇動者・教唆者」へと文化変容を遂げると観察している。

ウェーバーもまた，東エルベ地方の農民出稼の流出，及び，外国人出稼労働者の流入が，打穀機械の導入と集約的農業の普及に基づくものであり，同時にそれが伝統的な「家父長的労働制度」を破壊し，純粋な資本主義的賃労働契約を普及させつつあると指摘している。彼は，人口流出の原因が，賃金格差・経済的要因ではなく，むしろ経済的安定を犠牲にしても，家父長的地主に束縛される生活を捨て去り，自分の運命を自分自身で開拓する自由な賃労働者の立場を選び取ろうとする労働者の心理的要因にあると述べる。このように経済的利害関心を近代的自我の確立とあえて切り離して把握する点でウェーバーはカウツキーと異なるが，しかしそれだけに出稼を単なる経済的問題ではなく，近代的パーソナリティーの創出の問題として把握している点では一層鮮明である。

さて，トーマス＆ズナニエツキ，及び，パークも，移民・出稼を，資本主義の発展や諸個人の自我の確立と関連させて考察している。トーマス＆ズナニエツキは，ポーランド農民の出稼・移民の主要な動機が，「経済的上昇欲求」と「新しい経験を求める欲求」にあるとし，それらの欲求を，共同体の閉鎖性が解体して多様な可能性が出てきたことに基づくものと把える。また彼らは，出稼・移民による外部世界との接触が，ポーランド農民に「個人主義的態度」を醸成し，従来の家族や共同体を解体させることを指摘する。パークもまた，人口の地域的移動・移民の増大が，貨幣がもたらした非人格的関係に基づく産業組織の拡大と結びついており，生活向上を目指す人々の個人的関心に基づく移住が近代の特徴であると述べる。さらに彼は，移住に伴う新たな文化との接触・衝突が，伝統的社会組織・家族的紐帯を崩壊させ，「個人的人間」を解放し，社会諸関係の世俗化を推し進めると指摘するのである。

ところで，以上のような出稼・移民に伴う社会的・個人的諸変化をいかに評価するかという点になると，これらの諸研究は，それぞれ極めて多様な立場を提起している。

まずウェーバーは，一方で，ドイツ人の国内での移動の自由を近代的人権として擁護する。しかし他方で彼は，「国家理念」・ドイツ人の文化生活水準維持の観点から，「文化水準の低い」スラヴ人をドイツから閉め出すことを提唱する。彼にとって，出稼・移動を通した近代的自我の確立は，それがドイツ民族の文化的生活水準を維持・発展させる限りにおいて積極的意義をもつといえよう。結局，ウェーバーは，ユンカー経営の資本主義化という現状認識に基づき，資本家化したユンカーが「国民的立場」で存続しうる方策，即ち，まさにプロシア型資本主義確立の構想を探るのである。そしてそれを可能にする労働力供給源として，内国植民と土地持ち労働者の創設を検討する。しかしそれらが現実に可能である根拠までは論じていない。いずれにせよウェーバーにおいて，彼自身が析出した出稼農民の近代的自我の成熟は，彼の社会再編構想とは無縁なものに終わっているといわざるをえないのである。

これに対し，トーマス＆ズナニエツキ，及び，パークは，出稼・移民に伴う社会的・個人的諸変化に進歩的意義を見いだしている。トーマス＆ズナニエツキによれば，移民に伴う「社会解体」の過程は，同時に「合理的協同」に基づく新たな再組織化の過程でもある。パークもまた，「接触→競争→対立→適応→同化」の過程を，人類史における進歩の過程と把握している。こう

して彼らは，人種的競争を回避しようとしたウェーバーとは異なり，移民・移住の必然性とそれによる文明化の進歩的意義を強調するのである。

しかしここで注意すべきことは，彼らのいう「合理的協同」に基づく社会とは，具体的には現実のアメリカ資本主義社会を指しており，「同化」とは，現実の WASP （White Angro-Saxon Protestant）を中核とするアメリカ社会構造・社会規範への「適応」にほかならないという点である。そこには，諸個人の文化変容が，現実のアメリカ資本主義社会そのものの変動・変革にいかに連なっていくのか，という問題設定はそもそもなされない。とりわけパークが，「同化」が単純な同質性の獲得ではなく，諸部分の差異に基づき，それぞれの文化の異質性を認めあいながらも，諸部分が相互に依存する関係を作り出すことと規定するとき，それは，現実のアメリカ社会においては，容易に，移民がそれぞれの人種的な「分」を守り，協調を保つことと同義になる。彼らの移民・出稼論の特徴は，移民を通した「同化」の内実が，伝統的な共同体からの自立化から，アメリカの既存の階級構造 —— アメリカン・デモクラシー —— への「適応」へと一挙に吸収されていく点にあるといえよう。

カウツキーは，農民層の出稼に進歩的意義を認め，移転・移動のあらゆる制限に反対したが，ここで彼がいう出稼・移民の進歩的意義とは，単なる封建制の払拭にとどまらず，資本主義体制それ自体をも乗り越える労働者階級の成長という側面を，萌芽的に含意したものであった。カウツキーは，出稼労働者の労働諸条件が一般の労働者以上に劣悪であることを指摘し，出稼労働制度や児童の出稼労働，出稼先での労働時間や宿舎等々について，資本に対して一定の制限を加えることを主張している。また出稼労働者が当面，柔順な賃金押し下げ人・ストライキ破りとして資本に活用されるとしても，究極的には，それはプロレタリアの隊伍の外にいる労働人口を組織化することに連なり，その意味で資本に対抗する労働者階級を強化するものであると位置づけている。

しかしながら，こうしたカウツキーの認識には，資本主義それ自体の発展段階的認識，及び，後進資本主義国としてのドイツ資本主義が世界資本主義に占める位置に関する認識が欠落している。世界資本主義が独占段階に達した19世紀末，しかも後進資本主義国ドイツにおいて，彼は，「資本主義社会一般における農民層分解」を想定し，その証左を農民出稼に求めているのである。このような論理枠から見ると，農民出稼が単純な農民層の両極分解に伴う脱農化の一過程ではないこと，すなわちカウツキー自身が指摘しているように，農民層が出稼による賃金持参や送金を通して自らの小経営を維持し，農民層分解を阻止して自らの生活を守っているという事実のもつ意義は十分に明らかにされない。このことはまた農民出稼を，農民層分解を抑止しようとする地主階級に対する抵抗という要素のみにおいて把え，出稼先での資本家階級に対する対抗的・変革的要素を相対的に軽視することにも連なる。その意味で，前述の資本主義体制そのものを乗り越える労働者階級としての成長という文化変容を把握する視点はあくまでも萌芽にとどまり，結果的には，出稼農民の文化変容は，主要には，封建制の残滓を払拭する契機として位置づけられるのである。その限りではカウツキーの視角も，前述のトーマス＆ズナニエツキ，パークのそれと，本質的には同じであったといえよう。

それどころか，出稼・移民労働者と資本主義との間の矛盾という点に限ってみれば，トーマス＆ズナニエツキ，パークの出稼・移民論の方が，カウツキーのそれより，一定のリアリティをさえ有していた。このことはいうまでもなく，カウツキーが主要に研究した1890年代のドイツ農村に比べ，トーマス＆ズナニエツキ，パークが研究対象とした1920年代のアメリカの大都市シ

カゴでは，資本主義社会における移民の葛藤・諸矛盾が明らかに顕在化していたという事実に基づいている。トーマス＆ズナニエツキ，パークは，彼らがいかに現実のアメリカ社会への「適応」の進歩的意義を確信していたとしても，それが決して順調に進まないことを事実として認めざるをえなかったし，またそうした進歩的意義を確信する以上，移民の「不適応」を移民自身のミクロな心的構造の分析に積極的に求めていかざるをえなかったのである。

トーマス＆ズナニエツキは，古い社会体系の急激な没落を経験し，さりとて新しい社会体系に基づく状況定義・生活組織を十分に行えないことからくる移民の「個人解体」状況を提示した。またパークは，経済的競争を基盤とし，文化的・身体的差異を契機として結晶化する「人種的偏見」・非人格化の問題を取り上げ，それとの関連で，二つの文化の境界を「よそ者」としてさまよい続ける移民の「マージナルマン」的人間類型を析出した。こうした分析は，それ自体，カウツキーやウェーバーのように，出稼・移住経験を，「農民から賃労働者へ」「ドイツ人のポーランド化」といった単純な階級的・民族的意識転換と把えるのではなく，むしろ農民的・ポーランド的認知枠によるアメリカ資本主義の状況定義とその挫折等々，出稼・移民特有のよりリアルな社会心理構造を把握するものであった。また特にパークの主張は，単に移民の側の心理構造の分析にとどまらず，それをもたらすアメリカ人側の「人種的偏見」を把えることにより，アメリカ社会が内包する矛盾の一端をも示していた。

しかしそれにもかかわらず，前述のごとく，彼らの問題設定は，あくまでマクロな社会変動を所与の前提とし，そこでの移民・出稼者諸個人の心理的「不適応」に限定されている。彼らが明らかにした移民の心的構造が，いかに既存のアメリカ資本主義社会を変動・変革させていくのかといった点は，不問に付されているのである。移民の抱える諸矛盾は，二つの文化をくぐり抜けてきた移民特有の矛盾として把えられ，アメリカ資本主義そのものの矛盾としては把握されない。パークの「人種的偏見」概念にしても，その最大の基盤とパーク自身が認めている経済的利害対立それ自体がもつ矛盾，特に労働者相互の経済的競争ではなく，労資の経済的対立という矛盾にまで掘り下げて考察されてはいないのである。

そこでむしろ根本的な問題は，トーマス＆ズナニエツキやパークにおいても，またカウツキーやウェーバーにおいても，ともに突破しえなかった限界，すなわち，出稼・移民に伴う諸個人の文化変容を，封建制の残滓の克服にとどまらず，資本主義体制自体の変動・変革への展望と結合して把握する視角が，いつ，どのような道筋において成熟してきたのかという点にある。

ここでわれわれは，グラムシの出稼・移民論に到達する。グラムシの議論は，これまで見てきた論者のそれとは，出発点から異なっている。すなわち，グラムシは，移民・出稼の発生・展開を，資本主義一般ではなく，イタリア資本主義の「特殊性」との関連で把握している。イタリア資本主義は，国家権力・地主階級が農村を略奪し，農民層を貧困に陥れ，海外に移住させることによって育成されてきた。またその育成資金は，海外移民の稼ぎに大幅に依存していた。総じてイタリア資本主義・イタリア「帝国主義」の発展は，海外移民・移住を不可欠の基盤として行われてきたのである。

それゆえにこそグラムシは，イタリアの出稼・海外移民を，一方でイタリア資本主義が農民生活に押しつけた「災い」と把え，他方でイタリア資本主義の不可欠の構成要素をなす農業制度・地主階級への「現実的批判」と位置づけた。彼にとって，移民流出を余儀なくされる農民層は，それ自体として，特殊イタリア資本主義に対抗せざるをえない存在であったといえよう。

そこでまたグラムシが把握する出稼・移民の文化変容の内容も，決して，諸個人の自立化の礼

讃といった楽観的なものではない。もとよりグラムシも，かつての出稼・移住が封建制からの脱出であり，資本主義工業家と農民の共通の利益に基づく進歩的同盟を意味したことを指摘している。しかしながら，現実の移民流出は，アメリカ等において民族差別的な労働分業を創出して資本主義的搾取を容易にし，またアングロサクソン移民を知的・道徳的エリートとする差別的な民族文化の融合を推進していた。またイタリアにおいては，民衆の意識・文化の中に個人主義的でばらばらな「移民的性格」と「アメリカ神話」を醸成していた。そして双方の国において「不健全な人口構成」と労働者階級の民族主義的分裂を促進していた。総じて移民の存在は，資本主義の矛盾から労働者階級の目をそらせる機能を果していたのである。

しかもグラムシは，第１次大戦以後，世界資本主義が過剰人口を抱える中でイタリア移民が急速に減少するという事態に直面した。この事態は，前述のイタリア資本主義の特殊性を考えるとき，まさにイタリア資本主義の危機を意味していた。グラムシは，この経済条件の中に，ファシズムと共産主義の源を見いだす。そして共産主義革命の展望において，イタリア国内での出稼・移住に伴う農民と労働者階級との接触に重要な意義を発見するのである。

このようなグラムシの出稼・移民論は，20世紀初頭のイタリア資本主義の歴史的・国際的位置に関する認識を前提としている点で，カウツキーの理論を明らかに乗り越えており，また移民・出稼問題が世界資本主義の矛盾とイタリア社会の変動・変革の射程の中で取り上げられている点で，ウェーバー，トーマス＆ズナニエツキ，パーク等の理論をも克服している。ただし，本稿で検討した文献に限定する限り，グラムシは，アメリカにおける移民の主体的変容の内実を十分に把握しているとはいえない。そこで，移民を単なる「災い」と把え，共産主義革命に果たす移民体験の意義には十全に触れていない。またイタリア庶民における「アメリカ神話」の成立基盤，さらに「都市と農村の結合」を可能にする「農村心理に関する深い知識」の内実等々も，必ずしも明らかにされていないのである。

そこで問題は，次のように整理しうる。すなわち第１に，グラムシ以前の出稼・移民論からグラムシのそれへの飛躍が，いかなる道筋をたどり，成熟してきたのか，という問題である。第２は，グラムシの示唆的ではあるが断片的な論稿からは十分に読み取れない出稼・移民先での諸体験，とりわけカウツキー等々が強調している諸個人の自立化という文化変容それ自体が，単に封建制の残存物の払拭にとどまらず，資本主義体制それ自体の変動・変革においていかに位置づけられるのか，という問題である。こうした点を念頭において，以下，第３部では，後進資本主義国から帝国主義，そして社会主義へと，この時代を駆け抜けたロシア・ソヴェトにおけるＢ.И.レーニンの出稼・移民論をとりあげ，その発展過程を内在的に検討していこう。

資料――引用文献目録

《あ》

秋元律郎（1984）「R. E. パークにおける人種と文化」早稲田大学社会科学研究所『社会科学討究』30－1

秋元律郎（1989）『都市社会学の源流』有斐閣

浅野慎一（1985－a）「繊維都市における賃労働者層の変質と生産・労働―生活過程」北海道大学教育学部教育社会学研究室『調査と社会理論・研究報告書』８号

浅野慎一（1986）「出稼農民研究における社会学的分析視角の展開（その１）」北海道大学教育学部『紀要』48号

浅野慎一（1989－ａ）「第１次下請企業における職場構成と労働者諸階層の生産・労働 ― 生活史・誌」北海道大学教育学部教育社会学研究室『調査と社会理論・研究報告書』12号

浅野慎一（1989－ｂ）「巨大自動車企業・Ａ自工Ｍ製作所における職場構成と労働者諸階層の生産・労働 ― 生活史・誌」北海道大学教育学部教育社会学研究室『調査と社会理論・研究報告書』13号

阿閉吉男（1979）『ジンメル社会学の方法』御茶の水書房

阿閉吉男（1981）『ジンメルとウェーバー』御茶の水書房

家坂和之（1972）「東西の『人種』関係」『東北大学文学部研究年報』22

ウィルソン（1981）（Wilson, W. J）「人種・民族関係論の変遷」（山本　努・佐々木衛訳）ショート（Short, F. J）編『世界の社会学』恒星社厚生閣所収1986年

ウェーバー（1892－ａ）（Weber. M）：Die Verhältnisse der Landarbeiter im ostelbischen Deutschland (Schriften des Vereins für Sozialpolitik LV.)

ウェーバー（1892－ｂ）（Weber. M）：Privatenqueten über die Lage der Landarbeiter : Mitteilungen des Erangelisch-Sozialen Kongress Nr 4–5–6

ウェーバー（1893－ａ）（Weber. M）『農業労働制度』（山口和男訳）未来社1959年

ウェーバー（1893－ｂ）（Weber. M）：Die Erhebung des Vereins für Sozialpolitik über die Lage der Landarbeiter : Das Land I. Jg

ウェーバー（1893－ｃ）（Weber. M）：Die Erhebung des evangelicsh-Sozialen Kongress über die Ver Landarbeiter Deutschland : Christliche Welt. 7. Jg

ウェーバー（1894）（Weber. M）「東エルベ農業労働者の状態における発展諸傾向(1)(2)」（大藪・吉矢訳）『立命館経済学』13－４・13－５（1964年）

ウェーバー（1895）（Weber. M）「国民国家と経済政策」（田中訳）『政治・社会論集』河出書房新社1988年

後　房雄（1990）『グラムシと現代日本政治』世界書院

大内　力（1972）『経済学における古典と現代』東大出版会

大川健嗣（1979）『日本資本主義と農業』御茶の水書房

《か》

カウツキー（1894・95）（Kautsky. K）：Unser neuestes Programm ; Die Neue Zeit 13·1894/95·1

カウツキー（1899）（Kautsky. K）『農業問題』（向坂逸郎訳）岩波文庫（上下）1946年

角山　栄（1981）「世界資本主義とアジアの移民」『社会経済史学』47－４

梶田孝道（1988）『エスニシティと社会変動』有信堂

ガットマン（1976）（Gutman, H. G）『金ぴか時代のアメリカ』（大下・野村・長田・竹田訳）平凡社1986年

加藤房雄（1976－ａ）「19世紀末プロセイン農業経営の労働力構造と農業人口の階層構成」京大『経済論叢』117－４

加藤房雄（1976－ｂ）「『プロシア型』農業進化の構造・序論」京大『経済論叢』118－３・４

キタノ（1969）（Kitano, H. H.L）『アメリカのなかの日本人』（内崎訳）東洋経済新報社1974年

クォン（1987）（Kwong. P）『チャイナタウン・イン・ニューヨーク』（芳賀・矢野訳）筑摩書房1990年

グラムシ（1918）（Gramsci. A）「ウィルソンと社会主義者」山崎監修『グラムシ選集』５巻合同出版
グラムシ（1919）（Gramsci. A）「労働者と農民」山崎監修『グラムシ選集』１巻合同出版，石堂編『グラムシ問題別選集』１巻現代の理論社
グラムシ（1920－a）（Gramsci. A）「イタリアの権力」石堂編『グラムシ問題別選集』１巻現代の理論社
グラムシ（1920－b）（Gramsci. A）「反動」山崎監修『グラムシ選集』５巻合同出版
グラムシ（1921）（Gramsci. A）「アムステルダムとモスクワ」石堂編『グラムシ問題別選集』３巻現代の理論社
グラムシ（1924－a）（Gramsci. A）「イタリア国会での演説」山崎監修『グラムシ選集』５巻合同出版
グラムシ（1924－b）（Gramsci. A）「イタリアの危機」石堂編『グラムシ問題別選集』４巻現代の理論社
グラムシ（1926－a）（Gramsci. A）「イタリア状勢の検討」（1926年報告草案）石堂編『グラムシ問題別選集』４巻現代の理論社
グラムシ（1926－b）（Gramsci. A）「南部問題に関する若干の主題」石堂編『グラムシ問題別選集』４巻現代の理論社，山崎監修『グラムシ選集』２巻合同出版
グラムシ（1926－c）（Gramsci. A）「イタリア状勢とイタリア共産党の任務」石堂編『グラムシ問題別選集』４巻現代の理論社
グラムシ（Q 24《137》）（Gramsci. A）「都市と農村」山崎監修『グラムシ選集』４巻合同出版，『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 5）（Gramsci. A）「ヨーロッパ人口構成の合理化」山崎監修『グラムシ選集』３巻合同出版
グラムシ（Q 28. 29）（Gramsci. A）「都市型の知識人と農村型の知識人の地位の相違」山崎監修『グラムシ選集』３巻合同出版
グラムシ（Q 20）（Gramsci. A）「過激」山崎監修『グラムシ選集』６巻合同出版
グラムシ（Q 8）（Gramsci. A）「農民と農村の生活」山崎監修『グラムシ選集』６巻合同出版
グラムシ（Q 16《58》）（Gramsci. A）「移民と知識人運動」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 16《61》）（Gramsci. A）「アメリカニズム」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 16《149》）（Gramsci. A）「北部と南部」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 24《45》）（Gramsci. A）「アメリカとヨーロッパ」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 24《63》）（Gramsci. A）「イタリアとエジプト」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 24《79》）（Gramsci. A）「イタリアの農民」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 24《80》）（Gramsci. A）「イタリア人移民について」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 24《146》）（Gramsci. A）「過去と現在。移民」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 10）（Gramsci. A）「イタリアにおける国民と近代国家の形成と発展の上での政治指導の問題」山崎監修『グラムシ選集』２巻合同出版
グラムシ（Q 6《a》）（Gramsci. A）「作家の『積極的な』民族感情」山崎監修『グラムシ選集』３巻合同出版
グラムシ（Q 14）（Gramsci. A）「サンティ・スパラチオ」山崎監修『グラムシ選集』６巻合同出版
グラムシ（Q 16《24》）（Gramsci. A）「ブレッシャー神父の末流」『グラムシ獄中ノート』１巻大月書店
グラムシ（Q 16《44》）（Gramsci. A）「政権到達前後における階級的政治指導」『グラムシ獄中ノート』

1巻大月書店
グラムシ（Q16《50》）（Gramsci. A）「南北問題についてのアンマの文書」『グラムシ獄中ノート』1巻大月書店
グラムシ（Q16《62》）（Gramsci. A）「性の問題」『グラムシ獄中ノート』1巻大月書店
グラムシ（Q24《16》）（Gramsci. A）「フランチェスコ・トンマジーニ『世界政治とヨーロッパ政治』」『グラムシ獄中ノート』1巻大月書店
グラムシ（Q24《25》）（Gramsci. A）「イタリアのナショナリズム」『グラムシ獄中ノート』1巻大月書店
グラムシ（Q24《51》）（Gramsci. A）「ジョヴァンニ・パスコリ」『グラムシ獄中ノート』1巻大月書店
グラムシ（Q24《122》）（Gramsci. A）「ジュゼッペ・バラトーレ『1928年末におけるイタリアの経済・財政・貨幣』」『グラムシ獄中ノート』1巻大月書店
グラムシ（Q24《124》）（Gramsci. A）「ジョルジョ・モルターラ『イタリアにおける出生率と都市化』」『グラムシ獄中ノート』1巻大月書店
グラムシ（Q19《7》）（Gramsci. A） Sulla struttura economica nazionale : Antonio Gramsci Quaderni der Carere Ⅲ : Giulio Einaudi editore 1975
ケスラー（1979）（Käsler. D）『マックス・ウェーバー』（森岡訳）三一書房1981年
児玉正明（1981）「明治期アメリカ合衆国への日本人移民」『社会経済史学』47－4
駒井　洋（1989）『国際社会学研究』日本評論社
ゴールドソープ（1984）（Goldthorpe, J. H）『収斂の終焉』（稲上　毅訳）有信堂

《さ》

桜井　厚（1983）「生活史研究の課題」トーマス・ズナニエツキ『生活史の社会学』（桜井訳）御茶の水書房
佐藤智雄（1975）「少数者集団とマージナリティー」中央大学文学部『紀要』21
ジンメル（1908）（Simmel. G）：Soziologie 3 Aufl 1923
新保　満（1989）『カナダ社会の展開と構造』未来社
鈴木正仁（1988）『ウェーバーの社会学』世界思想社
ズナニエツキ（1938）（Znaniecki. F）「（ブルーマーに対する）コメント」（桜井　厚訳）『生活史の社会学』御茶の水書房1983年
住谷一彦（1970）『マックス・ウェーバー』NHKブックス

《た》

高野政子（1972）「マルクス主義者の農民観」『一橋論叢』67－1
鼓　肇雄（1971）『マックス・ウェーバーと労働問題』御茶の水書房
トーマス（1909）（Thomas. W. I）：Sourse Book for Social Origins, University of Chicago Press
トーマス（1938）（Thomas. W. I）「（ブルーマーに対する）コメント」（桜井　厚訳）『生活史の社会学』御茶の水書房1983年
トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－a）（Thomas. W. I & F. Znaniecki）：The Polish Peasant in Europe and America, Reprinted 1974 New York
トーマス・ズナニエツキ（1918～1920－b）（Thomas. W. I & F. Znaniecki）「ヨーロッパとアメリカにお

けるポーランド農民（抄訳）」（桜井　厚訳）『生活史の社会学』御茶の水書房1983年

《は》

パーク（1914）（Park. R. E）：Racial Assimilation in secondary Groups with Paticular Reference to the Negro : The American Journal of Sociology 19–5

パーク（1916）（Park. R. E）「都市」（笹森秀雄訳）鈴木　広編『都市化の社会学』誠信書房1965年

パーク（1917）（Park. R. E）：Race Prejudice and Japanese-American Relations, being “Introduction” to J. F. Steiner, The Japanses Invasion (Chicago) / Race and Culture, Free Press 1950

パーク・バージェス（1921）（Park. R. E & E. W. Burgess）：Introduction to the Science of Sociology : The University of Chicago Press

パーク（1923）（Park. R. E）：A Race Relations Survey, Journal of Applied Sociology, VIII

パーク（1926－a）（Park. R. E）：Our Racial Frontier of the Pacific, Survey Graphiv, LIV

パーク（1926－b）（Park. R. E）「仮面の背後にあるもの」（好井裕明訳）『実験室としての都市』御茶の水書房

パーク（1928－a）（Park. R. E）「人間の移住とマージナルマン」（好井裕明訳）『実験室としての都市』御茶の水書房

パーク（1928－b）（Park. R. E）「人種偏見の基盤」（好井裕明訳）『実験室としての都市』御茶の水書房

パーク（1931）（Park. R. E）「ウィリアム・グラハム・サムナー，ウィリアム・Ｉ・トーマス，フローリアン・ズナニエツキーの社会学的方法」（好井裕明訳）『実験室としての都市』御茶の水書房1986年

フェラロッティ（1972）（Ferrarotti. F）『オルターナティヴ社会学』（古城・マッヂ・元島訳）合同出版1985年

藤田弘夫（1990）『都市と国家』ミネルヴァ書房

ブルーマー（1938）（Blumer. H）「社会科学における調査研究批評Ｉ」（桜井　厚訳）『生活史の社会学』御茶の水書房

ベンディクス（1962）（Bendix. R）（折原　浩訳）『マックス・ウェーバー（上・下）』三一書房1987・88年

《ま》

松本悠子（1984）「革新主義時代におけるタマニーホール」『西洋史学』134

水野節夫（1979－a）「『ポーランド農民』の実質的検討にむけて」法政大学社会学部『社会労働研究』26－2

水野節夫（1979－b）「初期トーマスの基本的視座」法政大学社会学部『社会労働研究』25－3・4

村上丈司（1981－a）「マックスウェーバーと農業労働調査研究」『立命館産業社会論集』27

村上丈司（1981－b）「ドイツにおける初期の社会踏査の展開とその特質」『立命館産業社会論集』29

森　廣正（1986）『現代資本主義と外国人労働者』大月書店

森田桐郎編（1987）『国際労働力移動』東京大学出版会

《や》

矢沢修次郎（1984）『現代アメリカ社会学研究』東京大学出版会

山口和男（1959）「ウェーバー『農業労働制度』の解説」ウェーバー（1893）巻末
山口和男（1974）『ドイツ社会思想史研究』ミネルヴァ書房
山田史郎（1982）「レオナルド・コヴェロと移民の教育」『西洋史学』127
山田史郎（1988）「アメリカのイタリア人」清水・北原編『概説イタリア史』有斐閣選書
山之内靖（1969）『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社
山本左門（1981）『ドイツ社会民主党とカウツキー』北大図書刊行会
油井大三郎（1989）「19世紀後半のサンフランシスコ社会と中国人排斥運動」『世紀転換期の世界』未来社
好井裕明（1984）「パーク偏見論の問題点」町村・好井編『実験室としての都市』御茶の水書房

《ら》

ルイス（1978）（Lewis, W. A.）『国際経済秩序の進展』（原田訳）東洋経済新報社

《わ》

ワレン（1980）（Warren. B）：Imperiarism : Pioneer of Capitalism. London
渡辺　寛（1963）『レーニンの農業理論』御茶の水書房